



目次

CONTENTS

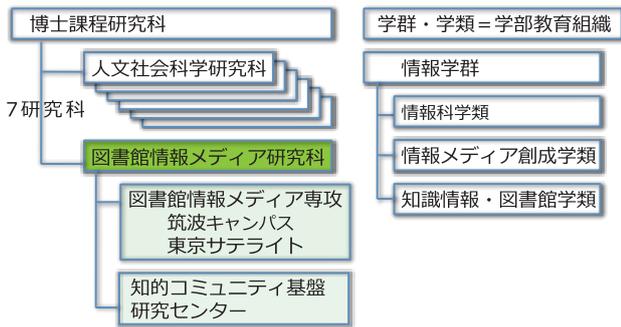
■ 図書館情報メディア研究科の概要	2
■ 入学から修了まで	4
■ 学位論文	8
■ 学生の声	12
■ 教育研究分野	20
● 情報メディア社会分野	20
● 情報メディアマネジメント分野	24
● 情報メディアシステム分野	30
● 情報メディア開発分野	36
■ 研究科の活動	42
国際連携	42
貴重資料と大型コレクション	43
図書館流通センター図書館経営寄附講座	44
図書館経営管理コース	45
知的コミュニティ基盤研究センター	46
連携機関	48
■ 大学へのアクセス	49

図書館情報メディア研究科の概要

図書館情報メディア研究科とは

図書館情報メディア研究科は、筑波大学大学院の博士課程7研究科の一つです。研究科には、博士前期課程2年と博士後期課程3年からなる区分制課程の図書館情報メディア研究科と知的コミュニティ基盤研究センターが設けられています。

関連の強い教員組織は、図書館情報メディア系であり、学部教育組織は情報学群の情報メディア創成学類および知識情報・図書館学類です。



1 目標

本研究科では、人間の知的活動の基盤として知識・情報の流通を担うソフトインフラ全体を対象に、図書館情報学と情報メディア学にかかる教育と研究指導を行ないます。

「情報メディアによる社会の知識共有とその仕組みにかかる教育と研究指導を通して、学生の資質向上と人格の成長を促し、新しい時代に向かっ

て社会をリードする人材を養成すること」が本研究科の目標です。

●博士前期課程

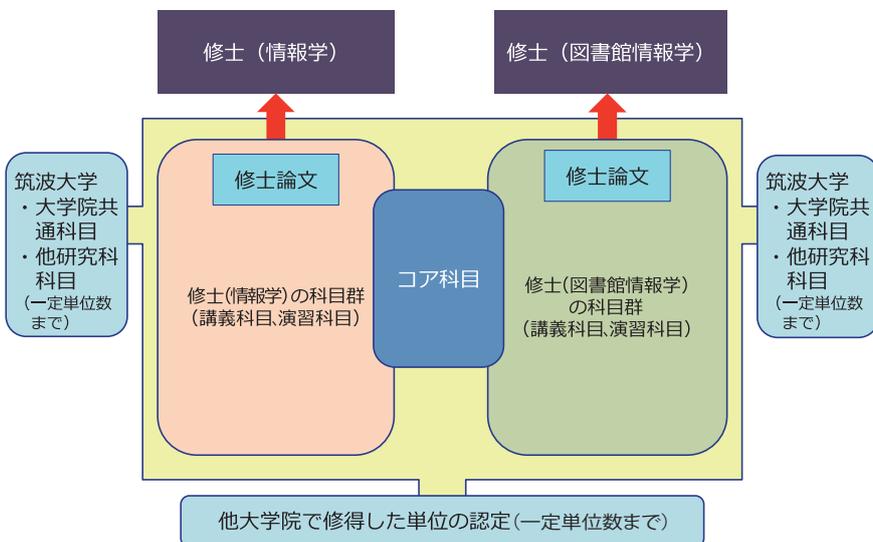
博士前期課程は、情報技術とサービスの深い理解の上に、情報の創成、管理、提供サービスにかかわるさまざまな実務や研究開発の場においてリーダーシップを発揮する専門職業人、理論と実践の調和のとれた人材、著しく進歩する分野にあって将来の動向を見通せる人材を養成します。また、研究者として専門知識・技術を身につけ、博士後期課程に進学する人材を育てます。

本課程では、学ぶ目的・内容を明確化した、修士(情報学)と修士(図書館情報学)の学位に即した教育プログラムを基本としています。厳選された科目群によるコースワーク中心の課程であり、知識と技術の定着を図る演習科目の必修化が特色です。

この他に秋入学の留学生を対象とし、英語による講義、演習、研究指導を基本とする「図書館情報学英語プログラム」を開設しています。また、東京都文京区の筑波大学東京キャンパス文京校舎において、図書館職員等現職者を対象とする標準履修年2年の「図書館情報学キャリアアッププログラム」と、標準履修年は1年の履修証明プログラム「図書館経営管理コース」を開設しています。

●博士後期課程

博士後期課程では、修士段階での研究テーマを



図書館情報メディア研究科の前身は図書館情報大学大学院情報メディア研究科です。図書館情報大学は、1921年に開設された文部省図書館員教習所をルーツとし、その後、図書館短期大学(1964年設置)を経て、1979年に設置されました。1984年には、大学院図書館情報学研究科修士課程が開設され、1999年には区分制博士課程として情報メディア研究科が設置されました。2002年10月の図書館情報大学と筑波大学の統合により、大学院も新たな図書館情報メディア研究科としてスタートしました。

高度化・精緻化させさせた研究テーマについて、多面的かつ多角的な教育と研究指導を行うことにより、理論的な展開力、洞察力、独創性、創造性、グローバルな視点を兼ね備えた、知識情報社会のフロンティアを切り開く人材として、研究者や大学教員、情報関連分野の指導者などの高度専門職業人の養成をめざします。

本課程では、博士（情報学）、博士（図書館情報学）、博士（学術）の学位を授与しています。

2 期待する入学者像

本研究科の扱う領域は総合的かつ学際的な領域です。筑波大学情報メディア創成学類および知識情報・図書館学類の卒業生を中心に、最新の知識と技術を学びたい、より人間的な成長を目指したいという意欲をもつ人を歓迎します。

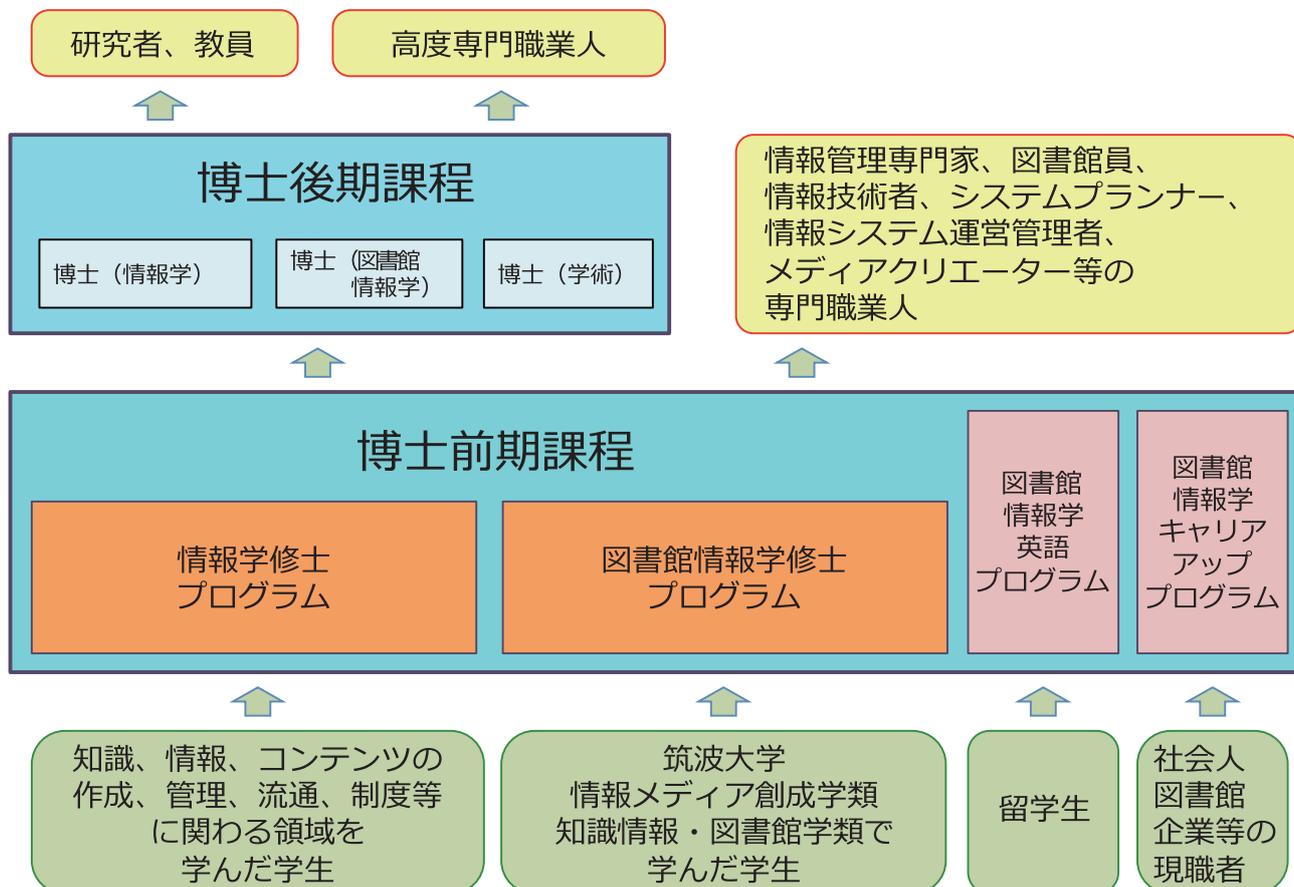
また、必ずしも図書館情報学、情報メディア学を学んでこなかった人でも、それぞれの能力、知識を生かし「21世紀の知識情報社会のフロンティアにおいて知識と情報の専門家になろうとす

るインセンティブのある人」を幅広く受け入れます。複数の領域を学ぶことによって、複眼的な思考と技術を身につけた人材として育つことを期待します。

なお、筑波大学は、現在3学期制を採用しておりますが、2013年度より2学期制（4-9月、10-3月）に移行する予定です。

3 国外で学ぶ機会

本研究科は、国際的にも、図書館情報メディア領域における最大規模の教育研究組織です。研究科として、北京大学信息管理系（中国）、上海図書館（中国）、ベトナム国立図書館（ベトナム）、デンマーク王立図書館情報大学（デンマーク）、ピッツバーグ大学（米国）、ミシガン大学情報学研究科（米国）、釜山大学校（韓国）と研究交流協定を結び、グローバルな視点で教育研究を展開しています。これら機関との協定には、学生の相互交流が含まれています。



入学から修了まで

入学試験

博士前期課程および博士後期課程の入学試験は、次のとおりです。

課程	試験区分		試験期	定員	
博士前期課程	推薦入学試験		7月期	7名	
	一般入学試験	一般選抜	情報学修士プログラム 図書館情報学修士プログラム	8月期	27名
		外国人留学生特別選抜	情報学修士プログラム 図書館情報学修士プログラム	および 2月期	
			図書館情報学キャリアアッププログラム		
			図書館情報学英語プログラム	2月期	
博士後期課程	一般入学試験	一般選抜 社会人特別選抜 外国人留学生特別選抜	8月期 および 2月期	18名	

博士後期課程の外国人留学生は、研究調書等を英語で記載し、口述試験を英語で受験することもできます。

なお、筑波大学大学院修士課程あるいは博士前期課程を修了し、引き続き博士後期課程に進学する場合、検定料と入学料は不要です。

学生募集要項の公表は、4月下旬の予定です。

2013年度入試日程(日程は2012年4月から2013年2月)

課程	選抜	出願日	学力検査日
博士前期課程	推薦	6月14日(木)・15日(金)	7月 5日(木)
	一般(8月)	7月17日(火)~19日(木)	8月 21日(火)・22日(水)
	一般(2月)	1月 7日(月)~ 9日(水)	2月 4日(月)
博士後期課程	一般(8月)	7月17日(火)~19日(木)	8月 23日(木)
	一般(2月)	1月 7日(月)~ 9日(水)	2月 5日(火)

入学資格

博士前期課程にあつては、学群・学部段階での専門領域、博士後期課程にあつては、修士段階での専門領域にこだわらず、多様な領域から幅広く受け入れます。分野・経歴・年齢・国籍を問わず、学ぶ意欲・研究意欲の高い人を募集します。

また、博士前期課程にあつては、大学を卒業した者と同等以上の学力、博士後期課程にあつては、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた場合にも出願資格が与えられます。この条件で志願する場合は事前に本研究科による出願資格審査を受ける必要があります。出願資格審査は書類審査のみで、費用は無料です。

選抜方法

●博士前期課程

推薦入学試験は、所属長の推薦書のほかに事前に提出いただく研究計画（事前に希望する研究指導教員と連絡をとって作成したもの）と口述試験の結果とを総合的に判定します。

一般入学試験では、提出書類、TOEIC(IPを含む)あるいはTOEFL (ITPを含む)の得点を換算したものと口述試験の結果を総合的に判定します。

●博士後期課程

博士後期課程の選抜は、提出書類と口述試験の結果を総合的に判定します。

●口述試験方法

口述試験は、博士前期課程は約30分、博士後期課程は約60分です。研究調書等に基づいた研究計画や志望理由などについてのプレゼンテーション（博士前期課程は約7分、博士後期課程は約15分）とそれについての質疑応答です。

なお、図書館情報学英語プログラムでは、口述試験をskypeを利用することもできます。

博士後期課程では、出願までに指導を希望する教員と連絡をとって、あらかじめ研究テーマなどについての相談をすませおくことが必要です。

なお、博士前期課程の場合は、入学後に研究指導教員を決めることにしています。

			一般	留学生	社会人	英語プログラム	図書館情報学キャリアアッププログラム	合計				
			志願合格	志願合格	志願合格	志願合格	志願合格	志願合格	志願合格			
博士前期課程	2011	推薦	-	-	-	-	-	14	14			
		8月期	44	23	8	6	-	-	0	0	52	29
	2月期	17	8	9	6	-	0	0	2	2	28	16
	推薦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	12
2012	8月期	27	19	7	5	-	-	1	1	35	25	
	2月期	20	10	5	2	-	-	1	1	27	14	
博士後期課程	2011	8月期	8	7	1	1	4	4			13	12
		2月期	2	2	0	0	3	3			5	5
	2012	8月期	3	3	0	0	0	0			3	3
		2月期	4	4	0	0	3	3			7	7

2012年図書館情報メディア研究科説明会日程

会場	日程	時間
筑波キャンパス	6月1日(金)・9月28日(金)	18:30~19:40
東京キャンパス	6月2日(土)・9月29日(土)	14:30~16:00

博士前期課程

博士前期課程では、教育課程の体系化の観点から「学位プログラム」という考えを導入した教育課程を編成しています。具体的には、修士（情報学）と修士（図書館情報学）の2つの学位に対応したプログラムを提供しています。このうち図書館情報学修士プログラムでは、さらに留学生を対象とした「図書館情報学英語プログラム」と現職者を対象とした「図書館情報学キャリアアッププログラム」を編成しています。

学生は30単位以上を修得し、修士論文を作成します。

教育目的・人材育成目的

●情報学修士プログラム

●図書館情報学修士プログラム

博士前期課程では、情報にかかわる分野においてリーダーシップを発揮できる、幅広い知識と実践的な能力を身につけた人材、および博士後期課程に進学する者を養成します。

●図書館情報学英語プログラム

国際的に通用する図書館情報学の実務者および研究者を育成します。特に日本の高度な情報技術をふまえた先端的な知識情報資源の管理・提供に関する知識や技術を身につけ、国際的に活躍できる人材を養成します。授業や研究指導はすべて英語で行われ、入学時期は2学期（8月）で、2年間の修学期間を経て、修了は1学期末（7月）のプログラムです。

●図書館情報学キャリアアッププログラム

知識・情報を扱う専門性の高い業務に携わる人々を対象とし、図書館情報学を学ぶ、学び直すことで、知識・情報を分析、加工、表現、伝達、提供、利用するための高度な知識・技術を身につけ、自らの業務の課題を見出し、解決にむけた実践的研究のできる人の養成をします。

プログラム名 科目名等	情報学 修士プログラム	図書館情報学 修士プログラム	図書館情報学 英語プログラム	図書館情報学 キャリアアッププログラム
講義科目	20単位以上、そのうち情報学修士プログラムの科目12単位以上	20単位以上、そのうち図書館情報学修士プログラムの科目12単位以上	20単位以上、そのうちResearch Methods in Informationを含む図書館情報学英語プログラムの科目12単位以上	20単位以上、そのうち図書館情報学キャリアアッププログラムの科目12単位以上
演習科目	情報メディア演習A(情報学)、情報メディア演習B及び情報メディア演習C及び情報メディア特別演習(情報学)	情報メディア演習A(図書館情報学)、情報メディア演習B及び情報メディア演習C及び情報メディア特別演習(図書館情報学)	Practical Seminar A, Practical Seminar B, Practical Seminar C, 及びSynthetic Seminar on MSc Research	情報表現法、研究の手引き、調査分析法、文献購読I、文献購読II及び特別演習のうちから10単位

博士後期課程

博士後期課程は、知識情報社会のフロンティアを切り拓くことのできる研究者や高度専門職業人の養成をめざします。学生は、講義科目を4単位以上、特別実験および総合特別実験を6単位以上修得したうえで、博士論文を作成します。

博士（情報学）、博士（図書館情報学）もしくは博士（学術）のいずれかの学位が取得できます。

科目名	単位	摘要
講義科目	4単位	
特別実験A	1.5単位	研究指導教員が担当する科目
特別実験B	1.5単位	研究指導教員が担当する科目
総合特別実験I、II	1.5単位	それぞれの副研究指導教員が担当する科目

授業と単位

筑波大学は3学期制を採用しており、4-6月が1学期、9-11月が2学期、12-3月が3学期です。1時限（75分間）の授業を10回受講すると講義と実験・演習は1単位、特別実験は0.5単位です。

時限	授業時間
1時限	8:40 - 9:55
2時限	10:10 - 11:25
3時限	12:15 - 13:30
4時限	13:45 - 15:00
5時限	15:15 - 16:30
6時限	16:45 - 18:00
7時限	18:20 - 19:35
8時限	19:45 - 21:00

東京サテライト

図書館情報学キャリアアッププログラム及び博士後期課程の社会人学生に対する夜間開講（午後6時20分から午後9時までの7・8時限）と土曜日開講（午前10時10分から午後6時までの2～6時限）の教室として東京サテライト（東京キャンパス文京校舎）が用意されています。

東京サテライトでは、筑波キャンパス（春日エリア）にいると同等なネットワークアクセスが可能であり、附属図書館のオンラインジャーナルなどにもアクセスできます。



研究環境

春日エリアでは、大学院生には個人用の机と、夜間・休日の図書館情報学図書館を始めとする建物への入室、コピー機などに使うICカードを貸与します。また、コンピュータアカウントを申請すれば、Webページスペー

スなど、潤沢なコンピュータ資源が利用できます。



学会発表

大学院生が国内外の学会に出席して発表する際の参加費や旅費を支援する制度があります。

2011年度は延べ50名以上がこの制度を利用して学会発表を行ないました。



TA・TF・RA

TA(Teaching Assistant)として学群や大学院の授業の補助を行う機会及びTF(Teaching Fellow)として授業担当教員のもとで授業に参画する機会並びにRA(Research Assistant)として教員との共同研究を行う機会があります。

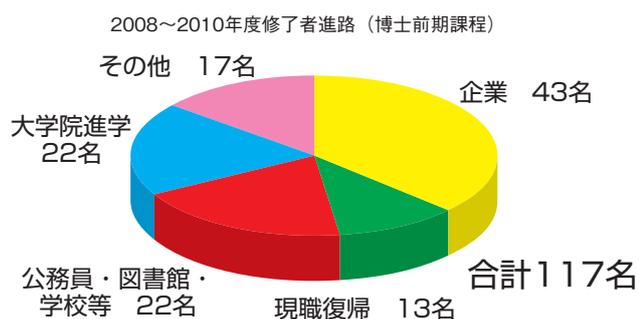
2011年度は、学群のTAとして、博士前期課程の院生延べ78名、後期課程の院生延べ17名(TF:3名含む)が任用されました。RAとしては、博士後期課程の院生9名が任用されました。

奨学金

奨学金としては、日本学生支援機構の奨学金制度が利用できます。2011年度においては、博士前期課程で32名の学生が、博士後期課程で11名の学生が奨学金を受けています。なお、この奨学金には返還免除制度があり、博士前期課程で3名、博士後期課程で1名の学生が全額もしくは半額免除になりました。

また、2010年度より本学独自の奨学金制度「つくばスカラシップ」が創設されました。この他に、地方公共団体、民間の育英団体の奨学金事業も多数あります。博士後期課程の大学院生には日本学術振興会の特別研究員の道もあります。

修了生の進路



学費と授業料免除

入学時の経費（2012年度）は

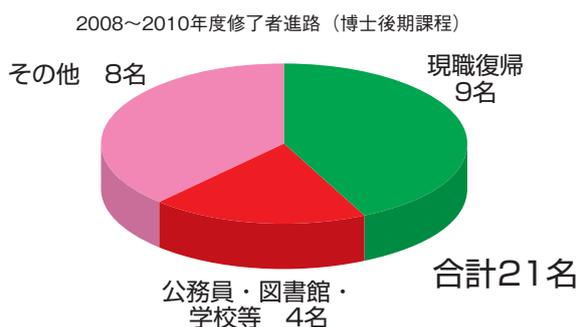
入学料 282,000円

授業料 535,800円

です。経済的理由により納付が困難な学業成績優秀な者には、授業料を免除する制度があり、博士前期課程で5名、博士後期課程で11名の学生が授業料の全額若しくは半額免除を受けています。

学生表彰

修士論文が優秀であった博士前期課程の学生や、優れた研究成果をあげた博士後期課程の学生は、研究科の学位記授与式において表彰されます。また、その研究成果が学外においても高い評価を得た大学院生が日本学生支援機構の第一種奨学金を利用している場合は、奨学金返還免除選考の対象者となります。



★ 修士（図書館情報学）

- 図書館における大学生の情報探索行動
- 古事記・日本書紀における神代の生物の分類とそのデータベース化～解説に注目して～
- 古典籍の知識構造を起点としたアクセス手法の提案
- 大学図書館における研究開発の現状と課題に関する研究
- 日本の公立図書館が実施する図書館評価の理論と実際～評価学の理論に基づく分析～
- 国立大学法人化と研究生産性
- 筑波大学附属図書館における学問領域別にみる学生利用者の特徴
- 実世界指向ディスカバリサービスの開発
- 大学生における死の認識過程～質的調査を通しての考察～
- 音楽資料を対象とした OPAC の FRBR 化
- 明治時代の恋の句についての研究
～「明治新撰俳諧姿見集」を中心に～
- 韓国の記録物管理制度～刊行物管理を中心に～
- 教員研修機関における著作権研修の現状と課題
- 国内の鍼灸師養成施設図書館におけるサービスの現状と課題

★ 修士情報学

- シルエットベースの歩容識別手法による図書推薦
サイネージシステム
- 縦送り表示における文章の表示方法と読みの関係
- 自己理解のためのロールモデル可視化システム
- ネットワークの利用状態測定に基づく P2P ファイル共有の最適化方式
- 話題空間の構成に基づく探索的検索過程の可視化に関する研究
- 関数従属性と包含従属性を用いた XML-RDB マッピング手法に関する研究
- 3者間共食コミュニケーションにおいて食事行動が会話に与える影響
- がん患者の意思決定機会における情報支援
- 中学校美術科における鑑賞学習指導に関する研究
～教材教具の利用について～
- 表紙生成エンジンを用いた二次元配置型
Web キュレーションシステムの開発
- 声質変換における韻律特徴パターンの変換手法の研究
- Web ページの注目領域を対象とした情報探索・集約に関する研究
- 情報整理を支援する対話型検索インタフェースに関する研究
- メタデータスキーマと XPath を用いた HTML 文書からのメタデータ生成モデル
- 知的財産としての伝統的知識・フォークロアの保護
- Web データを対象とした包含従属性発見支援のためのランキング手法に関する研究
- 先住民族文化の法的保護の課題
- 東日本大震災前後のマイクロブログサービス Twitter における公共アカウントの利用分析

★ 修士（学術）

- わが国におけるトレードドレス保護の可能性
～店舗外観の保護を中心として～
- 雑誌『團圓珍聞』における挿絵の研究
～擬人的動物を描いた諷刺画に着目して～
- 『修紫田舎源氏』における「源氏香之図」の特徴

★ 博士（図書館情報学）

◆ 韓国の学校図書館における読書教育の課題 —日本の事例を参考にして— | 尹 ユラ

韓国の学校図書館における読書教育に関しては、韓国図書館協会により作成された『学校図書館基準』の中で規定されており、その規定には学習者中心の教育という考え方が反映されている。学習者中心の教育を実現するためには、その教育を理解し実践する教授者自体の育成と学習者の特性を把握する作業が必要である。そこで、本研究では、学習者である学校の生徒の特性と教授者である学校図書館担当教員の育成に注目し、韓国の学校図書館における読書教育の現状と課題を把握することを目的とした。(図1:研究の目標と構成)

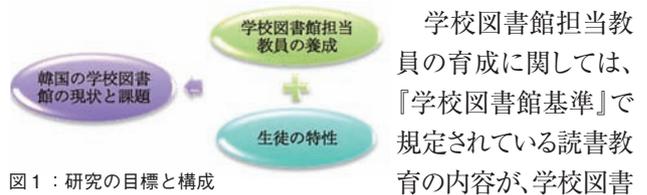


図1：研究の目標と構成

表1：調査方法

	生徒の特性	学校図書館担当教員の養成
調査対象	高校生に対する質問紙調査	読書教育のテキストブック分析
調査内容	読書と学校図書館に対する認識	『学校図書館基準』の反映度

学校図書館担当教員の養成プログラムで使用されているテキストブック調査の結果、いずれのテキストブックにおいても、学校図書館における読書教育、学校図書館の人的環境、学習者の特性、に対する記述が少なかった。それらの調査結果により、韓国の学校図書館担当教員の養成プログラムにおいて学校図書館に特化した教育が行われていないこと、読書に関する学校図書館の役割が一般的にも十分に認識されていない現状が明らかとなった。

次に、韓国の生徒の特性を調査した結果、読書に対する認識に関しては、本に対する嗜好以外に読書活動に影響を及ぼす様々な要因があることが明らかになった。また、学校図書館における読書教育に対する認識では、学校図書館と読書の関係性に関して高く認識しており、学校図書館担当教員も読書指導・相談を受ける相手として比較的重要な位

置を示していた。学校図書館に対して希望する読書教育の形態は担当教員との直接的な教育方法である「対面的な読書教育」を、内容的な面では「本の推薦」を挙げた生徒の割合が最も高かった。

これらの調査結果に基づいて、学習者に対する多様な特性を分析し、学校図書館の読書教員に適切に反映する方策を検討する継続研究の必要性を提起した。

(研究指導教員 緑川 信之)

★ 博士 (情報学)

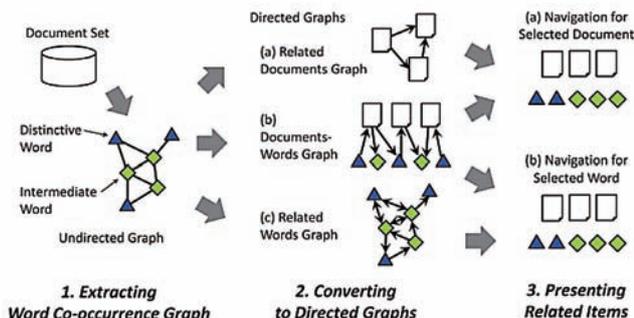
◆ 関連項目間の探索的な遷移を支援する 文書空間ナビゲーションの研究 | 島田 諭

現在の情報検索では、適切な検索語を想起して入力することがユーザに要求されるため、検索を行うユーザの負担が大きい。この負担を軽減するため、ユーザが自ら新たな検索語を想起して入力することなく文書空間内を探索できる文書空間ナビゲーション手法を提案した。

本手法の特徴は、文書集合のみを入力とし、空間内の探索性 (findability) をグラフ構造によって保証する点にある。

まず、少数の文書に出現し、文書内で複数回使用されることが多い語を抽出し、それらの語の共起関係に基づいて、有向グラフとなる関連語グラフ、関連文書グラフ、および語-文書グラフを生成する。この時、最大出次数を3以上10以下に制約することで、生成グラフが文書空間ナビゲーションに適する特性を示すことを明らかにした。

次に、このグラフを用い、選択された文書または語に対し関連語を提示してユーザを多様な関連項目へ遷移させる文書空間ナビゲーションを実装した。新聞記事を使ったユーザ実験で、文書空間ナビゲーションを使うグループのユーザは、従来型の全文検索を使うグループのユーザよりも、文書集合の特性に沿って、より多様な項目を閲覧できることを確認した。



[図の説明] 文書空間ナビゲーションの実現方法

(研究指導教員 佐藤 哲司)

★ 博士 (情報学)

◆ 境界音場制御の原理に基づく二次元スピーカ アレーを用いた音の指向性制御システムの研究

橋本 泰治

本研究は、多数のスピーカを配置し、それらの音響出力をコンピュータプログラムによって制御することで、音の伝搬方向を制御するシステムの構築に関するものである。境界音場制御の原理と呼ばれる理論に基づく音の指向性制御方法を採用し、実空間においてあらゆる方向への指向性形成を可能とするための手法を提案し、実験によってその有効性を検証した。

まず、システムが形成できる指向性の制約をなくすために制御音源の配置を従来の直線アレーから二次元アレーに拡張し、その制御境界として円形・楕円形境界を用いることを提案した。計算機シミュレーションによる検証の結果、正方形配列形と楕円形制御点の組み合わせによって、多方向に対して高い指向性を得ることができることを明らかにした。

次に、伝達関数の計測が困難な楕円形制御点を現実的な配置によるマイクロフォンを用いて等価的に制御する方法を提案した。また、さまざまな環境で安定した指向性を得るためにリフレクターを導入した。これらの手法を用いた音響ビームフォーミングシステムを試作し、実空間実験を通してその性能を評価した結果、提案システムは全方位に対して少なくとも15 degの精度でビームを形成できることを示した。

これらの研究の結果、実空間において動作する全方位に対して複数の音響ビームを同時に形成する事のできる全方位音響マルチビームフォーミングシステムを実現した。

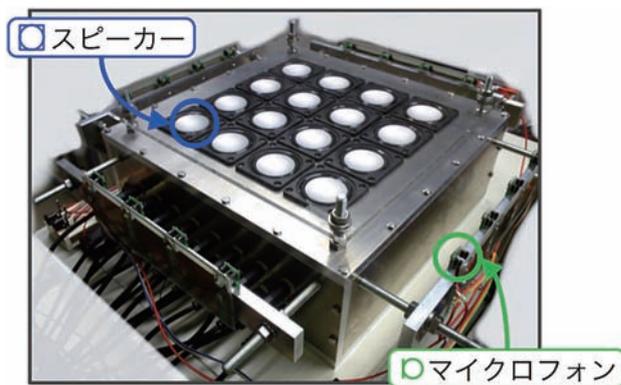


図. 開発した音の指向性制御システム

(研究指導教員 田中 和世)

★ 博士 (情報学)

◆ A Study on Agricultural Information and Information Dissemination Environment in Indonesia: Agricultural Commodities and Extension Services

Tri Margono

The objective of this study is to determine kinds of agricultural commodities represented in Asian scientific papers, to know the main topics on the commodities in each country, and to understand the trends of information in main countries of Asian during 1995-2004. Other objective is to identify the information gap issues between the government and the extension workers (EWs) based on literature reviews and surveys by using questionnaires and interviews.

In commodities study, the author has found that many technologies have been used by Asian countries to improve their agricultural commodities during 1995-2004. During this period, research in Indonesia focused on fertilizing. If these research results are disseminated well by the Indonesian government, then the agricultural productivity in Indonesia would continue to rise.

From the survey results in this commodity study, the author has found that there are many obstacles faced by the Indonesian government in disseminating information to farmers and EWs, such as limited communications infrastructure including Internet access, and other barriers such as geographic and social distance between potential users and the information center, etc. In reality, bibliographic information provided by the government is not always useful enough for farmers and EWs because of lack of access paths to the primary information resources. This means that the EWs and farmers need information about resource access to get primary resources efficiently. Therefore in this dissertation, the author proposed a metadata framework to solve the problem to filter farmers and EWs needs based on the findings in the study on information dissemination by the Indonesian government to EWs and farmers, as shown in the Figure. The metadata framework designed in this study includes not only descriptive elements for intellectual contents but also those for communication, logistics and access conditions.

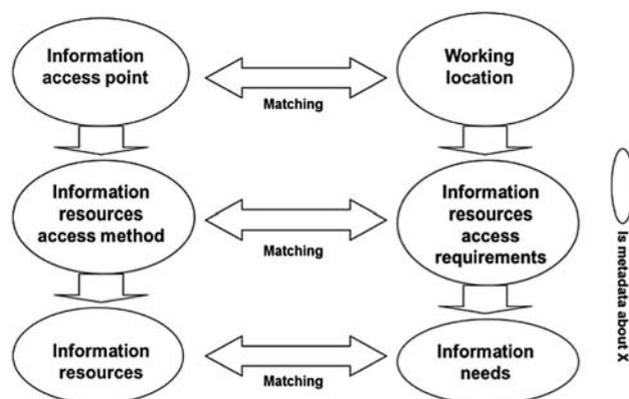


Figure. Accessibility of metadata framework for the EW's information resources access

(研究指導教員 杉本 重雄)

★ 博士 (学術)

◆ 村上春樹と中国

—中国における村上春樹の受容研究を中心に—

王 海藍

本研究は、中国においてここ15年ほど続いている「村上春樹熱(村上春樹ブーム)」という文学現象(社会現象)について、その受容状況およびその理由を解明しようとしたものである。

まず、中国における村上春樹文学の翻訳出版の現実を基に、その受容史を辿りつつ、その変遷と中国の社会及び文化に与えた影響を考察した。まず研究は、中国本土の11都市にある22大学の3000名の大学生を対象に、2008年5月～6月にかけて実施したアンケート調査を基に分析・考察を行い、その結果「村上春樹熱」が実は「『ノルウェイの森』熱」であったことを明らかにした。

また、本研究では、中国の文学研究者がどのように村上春樹文学を研究してきたか、その内容はどのようなものかについて触れ、それらの論文が村上春樹文学に対して「都市文学」、「ポストモダン傾向」、「現実的」、「孤独意識」をキーワードにしていることを明らかにした。

最後に、先のアンケート調査などから村上春樹文学の



人気の原因は、何よりも作品に漂っている「喪失感・孤独感・無力感」であると分析し、中国の現代化が続けば中国のプチブル(中産階級)に支持されてきた「村上春樹熱」はこれからも続くだろう、と考察した。

(研究指導教員 黒古 一夫)

(当該博士論文は、2012年2月にアーツアンドクラフツより出版された。A5判並製カバー装、本文224頁、定価税込み2,520円)

★ 博士 (学術)

◆ 戦後初期の国語科における新聞教育に関する研究
—大村はまの新聞教育を事例として—

稲井 達也

戦後初期の国語科教育における新聞教育に関する研究、中でも、新聞教育の実践について明らかにした研究は極めて少ない状況にある。本研究の目的は、戦後初期の国語科における新聞教育の状況と意義を明らかにし、国語教育者・大村はまの新聞教育の実践の検証を通して、その意義と課題及び新たな方向性について考察することを目的とした。そして、これらの目的を達成するために、①戦後初期の国語科における新聞教育の位置付けを示すこと、②戦後初期の国語科における新聞教育の実践状況を示すこと、③戦後初期の国語科における新聞教育の意義と課題を示すことの3点の課題を設定した。本研究の意義としては、①メディアという題材によって、学習指導要領と教科書、実践を新聞教育という一つの線でつなぎ、戦後初期の国語科教育を概観するとともに、戦後教育が目指したものの原点に行き当たることができたこと、②学習指導要領で示された理念が、どのように具現化されていたかをみること、中でも、大村はまの指導の下、実際に生徒の手によって作成された学校新聞『八中読売』と読書新聞『二C読書新聞』という資料の分析を通して、新聞教育の実践の内実を明らかにすることができた。結論として、大村はまの実践は、①新聞教育を通して、民主主義社会の言論主体の育成を図るという意義が認められること、②単元学習という方法によって新聞教育を行い、そこで与えられる言語経験を通して育成できる言語能力を示すことにより、国語科の学力との関連性を明らかにした意義が認められること、という2点の知見を得ることができた。

(研究指導教員 平久江 祐司、黒古 一夫)

★ 博士 (学術)

◆ 明治期唱歌集における西洋曲の研究

長谷川 由美子

本論文は明治期唱歌集掲載の西洋曲をデータとして整備した上で、西洋曲の元となった唱歌集とその移入経路、明治期唱歌集との関係、日本での詞と旋律の展開を考察し、明治期唱歌集掲載の西洋曲についての日本での受容を明らかにすることを目的とした。

最初に明治期唱歌集掲載の西洋曲を出版物単位と曲単位で調査し、西洋曲を掲載した出版物は363タイト

ル、曲の総数は5098曲、歌詞単位で数えた西洋曲は2632曲、旋律単位では1669旋律の数字を得た。

西洋曲の移入経路は4つに分かれる。第一は国会図書館所蔵の「文部省買入楽譜」40タイトル66冊で、多くのドイツ語圏の音楽が含まれる。第二は「文部省買入楽譜以外の楽譜」23タイトル32冊で、英語圏の歌の多くが含まれる。その結果、合計55%の旋律が「文部省買入楽譜」と「文部省買入楽譜以外の唱歌集」である「欧米唱歌集」中に掲載され、さらに、多くの歌詞で変遷した曲ほどこれらの楽譜群の旋律を使用していることも明らかになった。第三は讃美歌であるが、多くの旋律が「欧米唱歌集」と重複していた。最後に数は少ないが「警視庁音楽隊所蔵旧陸軍軍楽隊楽譜」に言及した。

日本での展開は詞と旋律について主に論じた。原詩と関係のない「作歌」が詞の大部分を占めることは定説となっているが、原曲とは関係のない詞は欧米唱歌集にも例があり、その結果、作歌と思われていた詞も欧米唱歌集をモデルとした例があることを明らかにした。

使用された旋律は、旋律が「欧米唱歌集」や讃美歌集に出典を持っているか、また原曲を参考にしたかに強く影響を受けること、また旋律のコピーは日本の唱歌集に掲載された既出旋律ばかりではなく、欧米唱歌集に戻って行われていた事もあったことが解明できた。

明治期唱歌集掲載の西洋曲は、その数だけではなく、歌詞、旋律ともに「欧米唱歌集」や讃美歌に多くを負っていた。

	旋律総数	「欧米唱歌集」	「欧米唱歌集」の割合	その他の出典の割合	「欧米唱歌集」と讃美歌集の両方に含まれた旋律
全体	1538	805	52%	48%	98
歌詞数1	1088	478	44%	56%	40
歌詞数2	238	146	61%	39%	16
歌詞数3	99	77	78%	22%	16
歌詞数4	46	41	89%	11%	10
歌詞数5	21	17	86%	14%	6
歌詞数6以上	46	45	98%	2%	21

旋律総数1669旋律の内、日本語だけの歌詞を持つ唱歌1538旋律における「欧米唱歌集」の割合

(研究指導教員 綿拔 豊昭)

学生の声

博士前期課程 今満亨崇

近未来書籍空間—遍在する読書空間—

読書を取り巻く環境は年々変化しています。特に最近では、電子書籍の流行によりその変化が大きくなると考えられます。すると、従来からの読書や、本のある空間にどのような変化が訪れるのでしょうか？ このような問いを考えるきっかけとして、宇陀・松村研究室は、筑波大学学園祭（雙峰祭）の場を利用し、中央図書館と共同で新しい読書の姿を考えるような展示企画を行いました。ここではその一部を紹介します。



基本的に、家具や小物を用いて四つの読書空間（キッチン、お風呂、公園、寝室）を演出しました。そして、その空間自体に関係したり、その空間で読みたくなる紙の書籍やアプリを入れた iPad を展示し、電子書籍と紙の書籍の融合を目指しました。

インタラクション本棚



来場者が気に入った本やページに付箋や葉を付けることのできる本棚。来場者同士のインタラクション促進を目指しました。

キッチン



食器棚やテーブルが置かれたキッチン。皿の上に本を置くことで、来場者はさながら食事をとるかのよう本を読むことができます。iPad にはレシピアプリを表示しました。

イベント



ARを使い物語への没入感を高めた「お話し会」



知的書評合戦「ビブリアバトル」

この企画は3日間で延べ2096名の方に来場いただき、学園祭の企画の中で最も優秀な企画として2年連続で表彰されました。これは、学術的な企画としては異例の快挙です。

詳しくは web で：<http://niccoli.slis.tsukuba.ac.jp/>



博士前期課程 重田 桂 誓

“未踏”な大学院生活

私は、修士1年の冬から2年の夏まで、約7ヶ月間、情報処理推進機構（経済産業省所管）の未踏 IT 人材発掘・育成事業（未踏ユース）に採択され、プロジェクトを行なっていました。未踏は情報系では有名で、採択された人の多くはその後、一流のクリエイターや研究者として活躍しています。起業する人も少なくありません。

未踏に採択されたことで、私は 170 万円もの資金を得ることができました。ユーザインタフェース研究者の増井俊之氏から直接アドバイスを受けることもできました。増井氏は携帯電話の予測変換システムやフリック入力を発明したり、NHK の IT ホワイトボックスに出演したりと、すごい方です。また、同じく未踏に採択された同世代のすごい人たちと交流する機会も多くありました。これらの経験をとおして、自分に足りないものに気づかされると同時に、自分の軸となるような部分が見えてきました。そして、無事プロジェクトを終えることができ、成果はそのまま修士論文につながりました。大学院で

の授業やゼミ、就職活動と並行してプロジェクトを進めるのは大変でしたが、大学院にいただけでは得られない、とても素晴らしい経験を得ることができました。みなさんもぜひ未踏にチャレンジして、すごい世界を体感しましょう!

実は、未踏の存在は私が大学に入る以前から知っていました。しかし、当時の私は「未踏に出しても受かるわけがない」と最初から諦めていました。それだけ自信がなかったのです。そんな私でしたが、大学・大学院と今の研究室で活動しているうちに、多くのことを経験して成長でき、未踏に採択されるまでになりました。振り返ってみると身近なところにすごい人がいるのも大きかったです。1学年上の先輩にも未踏に採択された方々がいます。その人たちの背中を遠くから追いかけてたら、いつのまにか自分がその人たちに近づいてました。人間、成長するためには環境が重要です。私は、図書館情報メディア研究科という環境のおかげで、未踏な大学院生活をおくることができました。



「未踏ユースの成果報告会」で発表している様子

博士前期課程 埴生 孝慈

「院生プレゼンバトル」で2冠

昨年、本学の学園祭にて開催された「院生プレゼンバトル（正式名称：大学院生学際研究フォーラム2011）」にて最優秀賞と高校生賞を受賞しました。院生プレゼンバトルは本学の大学院生が自身の研究に関して、「異分野の人にも分かりやすく」プレゼンテーションする能力を競うというものです。

私の所属しているグラフィックデザイン研究室では、「分かりやすく情報を伝える」ための情報デザインについて研究しています。伝えること自体が研究と言えるので、普段のゼミにおいても、研究内容のみならず、プレゼンテーション方法やスライドの構成、デザインについてのディスカッションや指導が活発に行われています。そのため、これまでの研究成果の一つとして、私自身の伝える能力を試すために出場しました。

プレゼンバトルを通じて、多くのものを得ました。異分野の人に伝える、というこれまでの研究発表とは全く異なる経験が出来たことはその一つです。加えて、高校生を含む一般の方や異分野の研究者の方から自身の研究について意見を頂けたことや、専門が異なる大学院生の研究について知れたことは良い刺激となり、結果以上に大きな収穫だったと感じています。

「院生プレゼンバトル」で2冠

「院生プレゼンバトル」は、大学ではなく、有志の大学院生らによる組織、つくば院生ネットワーク（TGN）が運営しています。出場をきっかけとして、TGNの活動そのものにも興味を持ち、関わらせていただくようになりました。現在は主に、2012年度以降の継続的な開催のための話し合いやジャーナル投稿などの活動に、出場者からの意見を反映させるという形で協力しています。

今後もこのような異分野間の交流に携わることで、専門以外の多くの知識を獲得していきたいと思っています。またその中で、情報デザインを学んでいる者として、そして異分野に対するプレゼンテーションを経験し、その能力を評価された者として、貢献していきたいと考えています。

可能性へと繋がる場

コンピュータやネットワーク技術の発展に伴い、情報爆発時代という言葉が使われて久しい昨今、「情報」をどのように捉え、扱い、関わっていくかを考えることは今後ますます重要になるでしょう。私自身は情報デザインという観点から取り組んでいますが、図書館情報メディア研究科では他にもコンピュータサイエンス、あるいは特許や著作権などの様々な観点から「情報」に対して取り組める可能性があります。

筑波大学全体としても、さまざまな学際的活動が行われており、その中には院生プレゼンバトルのように学生が中心となっている活動もあります。研究や授業以外でも、より多くの知識を得られる可能性へと繋がる活動がある場で学生生活を送れていることは、非常に幸せなことだと感じています。



「院生プレゼンバトル」：プレゼンテーションの様様



「院生プレゼンバトル」：表彰式で山田学長の激励を受ける

博士後期課程 常川 真央

博士後期課程 1 年次

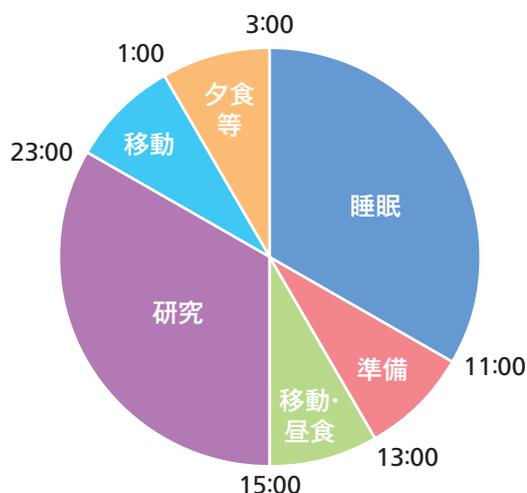
私は学習コミュニティの形成を支援するための人物推薦手法をテーマとして研究しています。普段は研究室でゼミ等に参加しつつ研究を行っています。

研究に取り掛かり始めると没頭してしまう性格のため、気が付けば終電ぎりぎりの時間となってしまうことが多いです。そのため、起きる時間は人と比べて非常に遅いです。

研究の具体的な内容は主に論文の執筆やプログラミングなどですが、その他にも研究に関連する数学やプログラミングの勉強の時間を確保する必要があります。そのために、週に1・2回程度の頻度で他の研究室の院生と共に小規模な勉強会を実施しています。月に1回程度は外部の IT 勉強会に個人的に参加することもあります。博士後期課程では大学の時間割に従って勉強することは無く、完全に自主的に勉強や研究を進める必要があります。必要な時間を確保できるような自分なりの生活スタイルを確立することが大事ですね。



ビブリオバトル首都決戦2011に出場



授 業：

博士後期課程で履修する科目の大半が指導教員やその他の教員からの研究指導が主な内容となります。そのため、普段は授業を受けることはほとんどありません。

ゼ ミ：

週に2度、4年生向けのゼミと院生向けのゼミがあります。その他に直接指導に当たる後輩とのミーティングの時間を週に1回設けています。

休 日：

平日では大学以外の場所に寄る時間が無いため、買い物などに出かける時間に使います。そのほか、IT関係の交流会に出かけることもあります。

ご 飯：

時間が時間なので外食であることが多いです。実家で夕食を作ることもあります。

移 動：

電車で通っています。移動中は論文や専門書を読む時間に充てています。研究室では論文の執筆やプログラム開発を行うので、意外に重要な時間帯です。

博士後期課程 小野 永貴

現役大学院生が高校教師に!

私は今、図書館情報メディア研究科の大学院に在籍（休学中）しながら、東京都内の高校で「情報科」の教諭をやっています。

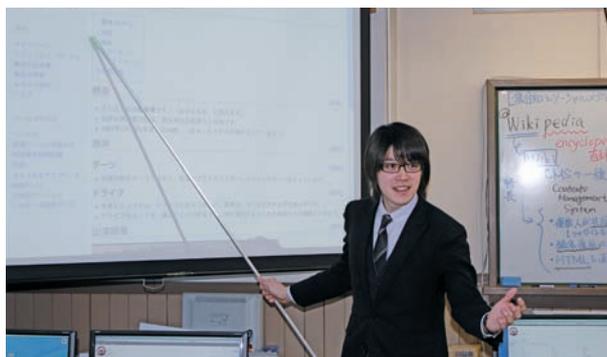
幼い頃から教師になることに憧れ、自分の高校時代に新設された情報科に興味をもち、情報技術と教育の両方をしっかり学べる大学を探して、筑波大学図書館情報専門学群（現：知識情報・図書館学類）に入学しました。そのまま大学院まで図書館情報学を専攻しつつ、大学院在学中に高校教諭の募集に応募し、ついに夢が叶った形です。

図書館情報学の経験を生かした教育の取り組み

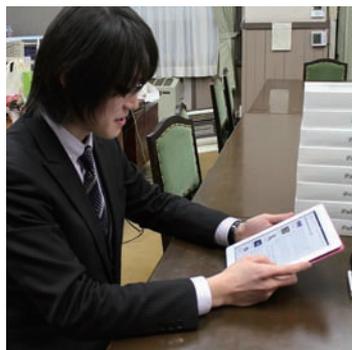
私が着任した高校は、国立大学附属の女子高校で、教員には授業だけでなく先進的な教育研究が求められます。私も日々さまざまな授業実践を考えては試行しており、例えば、

- Wiki を実際に編集して共同で Web サイトを構築する実習を通して、Wikipedia やソーシャルメディア・集合知の特性を認識する授業
- TED Conference や有名企業の製品発表会などの効果的なプレゼン事例を見て、発表技術のロールモデルとするプレゼンテーション練習
- 昨年逝去したスティーブ・ジョブズの生き様を通して情報メディア変遷の歴史を概観しつつ、映像配信や電子書籍などの最新メディアの活用を体験し、未来の情報社会の変化を予測する学習

など、学習指導要領の項目を踏まえつつ、最新の具体例やユニークなデモ・実習のアイデアを取り入れて、教科書より一歩進んだ学習を目指しています。



Wikiの編集を通して情報の信頼性や著作権、クリエイティブ・コモンズを学ぶ



iPadを活用した授業実践の研究中



プロジェクタ3台で光の三原色を実体験させるデモの工夫

また、授業以外でも次のような様々な校務に取り組んでいます。

- 学校図書館の新システム選定：WebOPAC や新聞DBの提供による学習環境向上、大学図書館との連携
- iPad 等のタブレット端末を用いた教育環境向上
- 成績処理データベースとシンクライアントシステムの導入によるセキュアな教員用情報環境の実現

大学院で「伝える引き出し」を拡げる

生徒に魅力的な情報の世界を見せるには、「具体的な技術応用例や社会の事例」の幅広い引き出しが無ければできませんが、本研究科はそれを得るのにピッタリでした。情報をいかに収集・蓄積・加工・伝達・発信し社会に役立てるかという一連の流れを探求する図書館情報学は、まさに情報教育で伝えるべき内容に合致しているためです。例えば、TAとして授業をサポートしたり、iPad 約 30 台を活用した授業を先生方と一緒に創らせて頂いたこと、学園祭の研究室企画「近未来書籍空間」で電子書籍の空間展示を行ったことや、未踏ソフトウェア創造事業を通して学生ベンチャーを立ち上げたことなど、大学院での多くの経験が今の私の「新しい教育実践のアイデア」の根源となっています。

教職を目指す人にとって、このような専門的知見を深められることは大学院の利点と考えますし、その証として「専修免許状」という上級の教員免許を得られることは大きな魅力と感じます。そして何より、「教える」という情報を伝達する立場の人間として、自分が探求したことを社会に還元できることが楽しいです。

最近では、興味ある大学の分野として「図書館情報学」を書いてくれる生徒が出てきたり、授業で学んだ横断検索サイトを使って図書館で希少な資料を見つけたと報告してくれる生徒がいたり、自分が工夫して授業したことが伝わっている手応えを実感できるようになってきて、とても幸せです。

博士前期課程修了 福田 純子

入学のきっかけ

「はやく図情においでよ。ね? 楽しいよ。」

当時の職場の先輩（社会人学生）にこう誘われたのは、今から約 10 年も前のことです。迷うこと数年、ついに入学する決意を固めました。

履修科目について

カリキュラムは年々変わりますのでご参考にはならないとは思いますが、通常の授業のほかに図書館経営管理コースも併せて受講しました。授業によってレポートや発表が多いものもありますが、通勤時間などの隙間時間を利用して準備をしました。

研究と論文執筆

日々の授業のレポートであれば隙間時間を見つけて行うことができますが、研究や論文執筆となると、どうしてもまとまった時間が必要になってきます。私の場合は、お盆と年末年始に長い休暇がありましたので、その時期に集中して研究を進めるようにしました。寝る間も惜しんでというよりも、健康を考えて最低限の睡眠時間はきちんと確保するように努めました。

社会人学生生活で大切なこと

社会人学生生活を送るにあたっては、やはり周囲の人々の理解を得ることが大切だと思います。

まず職場ですが、私の場合には職場の皆さんが理解し応援してくれましたので、大変助かりました。また家族の理解も大切です。特に女性にとっては、仕事+大学院の生活は家事の時間を縮小し家族に肩代わりしてもらうことにほかなりませんから、事前の理解は必須だと思います。この点も家族が家事だけでなく、研究についても大変協力的であったことは大きかったと思います。

大学院入学のメリット

まず、業務を理論立てて考える機会を得ることができることは、大きなメリットです。もちろん大学院に通わなくともそのような習慣をお持ちの方は多いとは思いますが、つつい目の前の業務に夢中になりがちで、その業務の意義や、長い目で見た場合の価値を考える暇がありません。仕事帰りに大学院に寄り、授業を受けながら、

自分の担当業務や図書館というものを俯瞰する機会が得られたことは大きいです。

また研究を行うことで、自分の新たなフィールドを深めることができます。不格好ながらも自分なりの研究を行い論文を執筆することで、自分を知ることができますし、今後の課題も見つけることができるのは非常に有意義な経験です。

先生やゼミ生との交流も、とても有り難く楽しい経験でした。研究だけでなく業務の相談に乗っていただいたこともありました。

研究や論文執筆等を行い苦心することで、利用者である大学生の学習・研究支援にもより親身になり対応することができるようになったように思います。

最後に

今、仕事をもっと楽しくしたい方、新しい人脈が欲しい方、自分の力を試したい方…そんな皆さんに、私は迷わずこうお勧めします。

「はやく図情においでよ。ね? 楽しいよ。」

(2011 年度 博士前期課程修了、
私立大学図書館勤務)



逸村先生と社会人学生の皆さんとも左から二番目が筆者

博士前期課程修了 高橋 公海

はじめに

私は現在、企業の研究員として働いています。大学院在籍当時とは少し異なる分野を扱っているため、新しく学ぶべきことは多くありますが、大学院の2年間で培った経験は現在の仕事の基盤として非常に役立っています。大学院生活の中でも授業、研究生活、そして友人についても少し紹介したいと思います。

授業

授業は1年次の1~2学期に集中して取るよう時間割を組みました。通常授業の他に夏休みの集中講義もあり、連携機関の研究者の方による講座など興味深い授業が多数用意されています。

授業は基本的に少人数で行われ、発表やレポート課題もあります。例えば、輪講を行うある授業では、英語の本を数十ページ読み、訳すという課題が毎週ありました。英語が苦手ではなくても、自分の専門とは異なる分野の本であったため専門用語が分からず苦労しました。平行して他の授業の課題や研究も進めていく必要があり、時間が限られていたおかげか、学期末には英語を読むスピードが上がったことを実感した覚えがあります。また、授業でクレイアニメを制作したり、連携機関を訪問してVRコンテンツなどを見せていただいたことも記憶に残っています。

本研究科では情報技術に関する知識、英語などの基本的なスキルだけでなく、人文・社会・理工系など複数の領域にまたがる学際的な分野を学ぶことが出来ます。これは、複眼的に検討を行う時や社会人になってから新しい分野の勉強を始める時など、現在もさまざまな場面で役に立っています。幅広くカリキュラムが用意されていますので、自分の専門とは少し異なる分野も学んでみてほしいと思っています。

研究生活

大学院で最も長い時間を過ごすことになるのが研究室です。週に1回以上は研究室のゼミ、それ以外に他の研究室と合同のゼミなどもあります。さらに、指導教員とも週1回程度議論を行いながら研究を進めます。頻繁に行われていたゼミでの研究発表や議論を通じて、物事を整理し論理的に考え、それを相手に分かるように伝える能力が養われます。これは就職活動や社会人になっ

てからも非常に役立っています。研究発表や議論は社会人になっても、日常的に行われており、特にプレゼンテーションは学生の時に学んで良かったと思っています。

さらに、研究室で一緒に過ごす仲間と、数学の自主勉強会や、トップカンファレンスの論文を分担して読む会も行っていました。深夜にホワイトボードの前でアルゴリズムやプログラミングの相談をしたり、一緒に授業の課題をやったり、論文締切前には夜遅くまで残って一緒に頑張ったことも今では良い思い出です。研究室の仲間が居たからこそ、頑張って乗り切れたことが沢山ありました。

最近でもたまに、大学院在籍当時書いていた研究ノートを見返すことがあります。2年間の研究生活を通じて経験したことは現在の糧になっており、特に指導教員と研究室の仲間には大変感謝しています。

人

本研究科は扱う学問領域だけでなく、学生も多種多様です。社会人学生や留学生、起業している人や未踏に応募して頑張っている才能にあふれる人も居ます。直接会って話をすると、自分の考えの狭さと世の中の広さ、価値観の多様さを感じます。筑波大の他の研究科にも良い意味で変わった方が沢山居ますので、積極的に交流してほしいと思います。自分の価値観や視野を広げることで、人生における選択肢が広がったように感じます。

おわりに

本研究科で過ごした2年間で、現在の自分を形成する非常に重要な基盤となっていることは間違いありません。これから入学される方にも多くのことを学び、忙しくも充実した研究生活を過ごしてほしいと思っています。

(2009年度 博士前期課程修了、
日本電信電話株式会社
未来ねっと研究所)

院生の研究生活

博士前期課程 安永 ゆい

私は、Webデータに対する問合せ言語について研究をしています。平日は毎日大学へ来て、授業以外の時間は研究室で過ごしています。

研究は、毎週のゼミを目安に進めています。ゼミでは研究内容を説明する／聞くことで、説明のスキルや質問のスキルを向上させることができます。また、現在複数人で研究に取り組んでいるため、チームでの作業の進め方も学べます。学外での研究発表会に参加することで、さまざまな意見をもらえると共に、他の研究者の研究に触れることで刺激にもなります。

授業は、幅広い分野の科目が設定されているので、興味に合わせて授業を取ることができます。私は大学院入学前にいくつか単位を取得していたので、1年次の各学期に2～3科目受講することで1年次に取得可能な単位を取り終え、2年次は必修の科目と研究に集中できるようにしました。

院生になると、週のうち授業が占める時間が少なく、比較的自由になる時間が増えるため、いかに自分の時間を管理するかが重要になってきます。

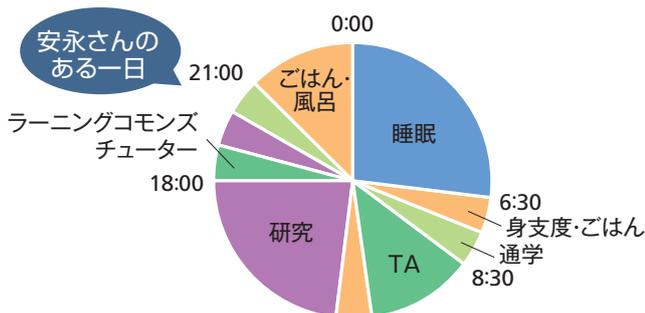
私は電車で通学しているのですが、行き帰り共に車両はあまり混雑することもなく、通学時間には研究についてゆっくり考えたり、英語の学習をしたり、趣味に使ったりしています。また、休日は休む・遊ぶ、と決めて楽しんでいます。

ゼミ：研究室内で行うゼミと他研究室と合同で行うゼミが毎週あります。

ごはん：自炊と外食が半々です。帰宅が遅くなる時は自炊をせず、お弁当を買います。

バイト：学群の授業のTAをやっている他、飲食店のバイトも行っています。

移動：つくば駅と春日エリア間の移動は徒歩、その他の移動は自転車を使います。



博士前期課程 池田 光雪

私は、XMLなどの構造化文書に対する問合せ手法をテーマに研究をしています。大学へはほぼ毎日行き、研究や授業の準備にあてています。

研究は毎週あるゼミの他に、学会発表や勉強会に広く顔を出すことで、多くの観点からさまざまな意見をもらい進めています。また、分野が違う相手への研究紹介は思いもよらない意見が出ることも多く、とても重要です。

授業ではさまざまなテーマについて発表やレポートを通してかなり深く掘り下げて学ぶ他、他分野の院生を相手に自分の研究をわかりやすく紹介する演習などもあり、多くのスキルを身につけることができます。また、修了要件は2年間で必修科目も入れて30単位とあまり多くないため、履修計画をしっかりと立てることにより研究や就職活動に多くの時間を割くことができます。

大学院での生活では無理のないスケジュール管理が最も大切です。メリハリのない生活は結果的には必ずマイナスになり非効率となりますので、休むときは休む、やるときはやるという強い意志力が研究活動の成果を左右するといっても過言ではありません。

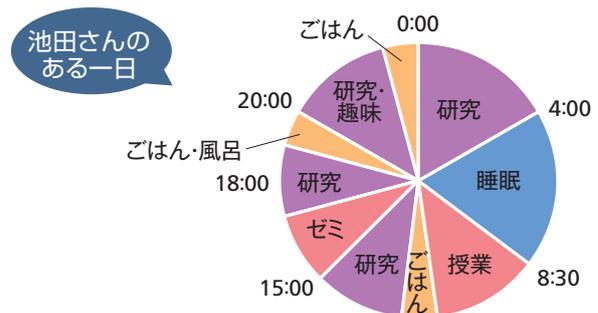
授業：発表が多く大変ですが、主体的に努力した分だけ深い知識が身につきます。

ゼミ：毎週あります。自分の研究を説明することで研究に対する理解度が増します。

ごはん：完全に外食です。歩いて数分の駅前にはフードコートがあるのでよく食べに行きます。

バイト：不定期でイベント運営などを請け負っています。TAも毎学期やっています。

移動：晴天の日は自転車、雨天の日はバスです。



教育研究分野

情報メディア社会分野

★研究対象

人と情報との関係は多方面にわたっています。【情報メディア社会分野】では、これを三つの点から捉えて、研究対象としていきます。

一つ目の方向は、情報が知識となって変容され、蓄えられ、そしてその中から必要なものを探し出して、新たな情報・知識を生み出していき、そのプロセスや方法を明らかにしていきます。【情報知識・情報資料研究】です。

二つ目の方向は、それら情報・知識が、特色ある文化をもった社会の中で、どのように生かされ、伝えられていったかを探っていきます。【情報文化・情報メディア史研究】です。

三つ目の方向は、情報・知識は、社会の中でどのような制度によって支えられ、どのような政策によって維持発展して来たか、もしくは今後どのように支え、発展させていくべきなのかを研究します。【情報政策・情報制度研究】です。

★★人材育成方針

基本は人と情報との関係を、《知識》《文化》《政策・制度》という、三つの点から理解した上で、問題解決、目的達成の方法を的確に考えられる人材を育成することです。具体的には、以下のような人材育成をめざしています。

- (1) 情報を加工して、有益な知識にできる
- (2) 情報を、それが生み出された社会の歴史や文化をふまえて、適切に処理したりすることができる
- (3) 関連する政策・制度を視野に入れて、情報知識を知的財産制度などに的確に位置付けることができる

これらは、人が社会を形成している限り、図書館に限らず、多くの業種、職業で求められている能力であり、それはまた、組織のためばかりでなく、一人一人の人生にも有用な能力と考えられるからです。

教員紹介

(*は連携教員)

いし い か おり
石井 夏生利
プライバシー・個人情報保護、
情報法

プライバシー・個人情報保護法を中心に、情報の取扱いをめぐる法的諸問題を比較法的に研究しています。また、法分野を横断的に捉える観点、新しい動きへの注目、国際的な動向に配慮しつつ、情報法の体系化をめざして研究しています。

こ ぐれ けい
木暮 啓*
情報メディアとコミュニケーション
の研究、消費者と市場の調査・分析

持続可能な市民社会を形成するために、情報メディアが果たす役割とコミュニケーションのあり方について研究する。ユビキタス社会の将来展望を、情報メディアとコミュニケーションの研究を踏まえて未来学的手法を用いて構想し、その社会的便益を考察する。また消費者、有望市場に関する調査を解説し、事例を分析する。

こ とう よし ひろ
後藤 嘉宏
社会情報学、コミュニケーション思想史

戦前、映画を議論の中心に据えた独自の美学を構築し、戦後国立国会図書館初代副館長を務めた中井正一の“媒介”論を、社会思想史的に研究している。さらにその研究を敷衍して、図書館からマスコミ、電子媒体までを射程に入れたコミュニケーションの基礎理論の構想を目論み、現在そのための理論と実証との兼ね合いを模索中である。

じょう ほ ひで お
上保 秀夫
情報検索、情報探索行動、
レファレンスサイエンス

人々の情報行動のうち、特に探索と検索に関して、人間の認知的・情緒的側面の理解を土台にして、知識情報資源にアクセスする新しい手法の提案・開発・評価を行っている。また、情報行動に影響を及ぼす様々な要素をコンテキストという枠組みで研究している。近年は協調作業による情報探索・検索の理解・支援にも興味がある。

しら い てつ や
白井 哲哉
日本地方史、歴史資料、
アーカイブズ学

16-19世紀日本の地方史と、その基本資料である地誌編さんの歴史について研究している。また、歴史資料の機能・解釈・調査・整理・保存・活用の歴史と方法について研究している。現在は、地域の記録や記憶を将来にわたり保存し、活用するための理論と実践上の課題について、アーカイブズ学や博物館学に学びつつ、総合的に考察しようと考えている。

呑海 沙織

図書館情報学, 図書館文化史

図書館の「これから」を考えるための図書館文化史が主たる研究テーマである。歴史的な時間軸の中で、図書館が文化的・社会的に、どのように進展してきたのか、また、図書館が取り扱う対象でもある情報メディアが、どのように発展してきたのかについて、知識情報基盤の形成という視点から分析する。

中山 伸一

応用情報学

蛋白質や化学物質の構造や性質などからの知識抽出に関する研究、化学や生化学領域などにおける知識の分析研究、小説の読後感など感性データの計測と予測研究、創造技法やデータマイニングなど知識化技法や知識抽出技法の開発と評価研究を行う。

原 淳之

図書館情報学, 図書館史

図書館、情報およびメディアの文化的な研究。日本、ドイツ、英国における19世紀以降の図書館や読書行動の変遷についての社会史的研究。具体的には図書館や読書サークルを扱う。また、現代の日本、ドイツ、英国における図書館情報制度、読書行動についての比較研究

真榮城 哲也

知識構造・表現, 情報生物学

様々な対象や現象を要素間の関係性の視点から構造を捉え、それらの持つ特性、関係性の複雑さや表現について研究している。知識と生物を主な対象とする。より具体的には、知識の構造の解析と表現方法や、利用者に適応させる情報提示、遺伝子や蛋白質等の生体分子の複雑な相互作用の解析・予測および高速シミュレーション手法、生物知識を表現し解析に利用する方法についての研究を行っている。

松縄 正登

知的財産法

特許法、意匠法、商標法、著作権法および不正競争防止法を中心とした知的財産法制度について、法的問題の考察、法解釈および判例研究などを行っている。特に、特許法については、特許審判、審決取消訴訟等に係る法制度の現状分析、課題と展望について研究を進めている。さらに、最近のデジタル情報技術と知的財産法に係る法的問題について、課題と解決策について考察を行っている。

松本 浩一

中国史, 中国目録学

道教の呪術儀礼、道士と民間宗教者の役割の関係、祠廟信仰などを、主として宋代の文献と台湾の実態調査から解明することをめざしている。同時に研究者の立場に立って、自分たちの用いる資料のデータベース化に取り組み、また中国古典の分類・目録を始め、文献学的研究もテーマとしている。

溝上 智恵子

高等教育政策, 文化政策

主たる研究テーマは高等教育政策と文化政策である。高等教育政策は日本、アメリカおよびカナダの高等教育政策に関して研究を行っている。また、文化政策はカナダとアメリカの文化関連施設の形成や展示物と多文化主義との関連性について、国民文化形成の視点から研究を行っている。

村井 麻衣子

知的財産法, 著作権法

知的財産法、特に著作権法についての研究を行っている。インターネットやデジタル技術が発達した現代における著作権法のあり方を検討している。

湯川 朋彦 *

情報社会論

情報化あるいはメディアの発展が、人間の行動や社会に与える影響について、歴史、産業、政策という3つの視点から考える。特に産業と政策の関連に注目し、具体的な事例を取り上げて、考察を行う。

横山 幹子

哲学, 知識論

私の研究テーマは、知識の本質や知識を共有する可能性について、分析哲学的な視点から考察することである。たとえば、知識と実在論の関係を考えることや相対主義の諸問題を考えることなどが、このテーマに属している。また、最近では、上記のテーマに関連して、蓄えられた知識の正しさについて考えることにも、非常に興味を持っている。

四元 正弘 *

消費者研究

情報メディア接触行動の分析、メディアビジネスの分析、消費者意識・行動の分析ならびに消費者インサイトの開発

綿拔 豊昭

日本文学, 日本図書館学

江戸時代の情報伝達手段のひとつは手紙のやりとりであった。その手紙の模範文例集である「往来物」は様々なものが出版された。それには注釈のあるもの、絵入のものなどがある。その「往来物」を中心に、当時の庶民向け書物について、図書館学、図像画などを視野に入れて、人文科学的な観点から研究をしている。

情報と法に関わる諸問題の総合的・多角的研究

石井研究室では、プライバシー・個人情報保護を中心に、情報と法に関する様々なテーマで研究を行っています。インターネットが当然となった現代社会において、情報の取扱いに関する新たな問題は日々生起しています。例えば、スマートフォンのアプリを用いた個人に関する情報の収集や解析、クラウド・コンピューティングをめぐる様々な法的問題（消費者保護、内部統制、情報セキュリティ等）、書籍の電子化と著作権など、枚挙にいとまがありません。新たな法制度との関連では、2011年の刑法改正によりウイルス作成罪が新設されたほか、国家機密を守るための秘密保全法制、社会保障・税の一体改革とマイナンバー法など、注目すべき法制度が次々と提案されています。石井研究室では、こうした新しい事象を含め、情報にかかわる法的問題を幅広く取り扱っています。

また、図書館に関する法制度や法的問題を研究したい学生さんも受け入れています。最近では、公文書管理法が2011年4月1日に施行されました。この法律は、情報公開法と深い関係を有しますが、それにとどまらず、図書館における情報管理のあり方にも大きな影響が及ぶものと考えられます。

ゼミの学生さんには、自由にテーマ設定をしてもらい、皆で意見交換をしながら研究の方向性を決めていきます。研究のスタイルは、専ら文献調査です。一つの裁判例に焦点を絞り、判例評釈を分析しつつ判決の妥当性を分析するもの、特定のテーマに関する近時の裁判例の傾向を調査し、判断基準のあり方を考察するもの、法律の規範的解釈論を展開し、法改正の提言を行うもの、先行研究の少ない分野の調査を行い、課題を発見するものなど、アプローチ方法は様々です。テーマによっては、必要に応じてインタビュー調査も行っています。

法学研究を行う際には、既存の議論にとらわれがちになる傾向があります。しかし、石井研究室では、特に新しいテーマに取り組む際には、先行研究を尊重しつつも、新たな発想で問題を考察できる視点を養うことを目指しています。



書誌学的手法を用いた日本文化研究

綿抜研究室での研究は、すでに研究されていないか、先行研究と異なる結果が出せそうであるということ
を前提とします。標準的研究方法は以下の通りです。

- ①情報の収集→日本の文化に関する情報を集めます。
- ②情報の選別→情報を収集する過程で、大まかな仮説をたて、必要な情報を絞り込みます。
- ③情報の整理・分類・数的処理→大まかな仮説のもとに情報を処理します。
- ④情報の特質等の明確化→処理した結果、どのような特質などがあるか、明確にします。
- ⑤仮説の設定→どうしてそのような特質などがあるか、仮説を設定します。
- ⑥仮説の検証→関連する文化情報等をふまえながら、その仮説について検証します。
- ⑦検証結果の知識化→知識化をもって研究成果とします。

一例をあげます。①日本の文化を代表する浮世絵をたくさんみる。②女性を描いたものが多くあり、その女性
の着物に着目すると、いろいろな絵柄があり、桜が描かれることが多い気がする（大まかな仮説）。③着物
柄に注目して調査し、調査対象とした浮世絵が何点、そのうち女性が描かれたもの何点、着物の絵柄何種類、
何柄が何点と数的処理をする。④その結果、桜柄が一番多いことが判明。⑤では何故桜柄が多いのか、その理
由を考え、仮説をたてる。⑥関連文献、資料等を調査して検証する。⑦その結果、このような理由で桜柄が多
いと結論付け、それを事典の項目になるようにまとめる。

料理書、俳諧書、楽譜といった書籍や雑誌等にみられる文化情報や近江八景に代表される「八景」という
文化情報を対象にしている院生もいます。こうした研究を通して、人間社会を見通す能力を身につけてほし
いと願っています。



この本は何の本ですか？

二人の女性の着物の柄は何か？

どこが「草紙洗小町」か？

情報メディアマネージメント分野

★研究対象

私たちのまわりには、書籍、雑誌、文書、インターネット上のファイルやデータベースなど、多種多様な情報メディアが溢れています。これらを有効に活用し、利用者の多様なニーズに応えられるようにするためには、さまざまなレベルの管理・運営の仕組みが必要となります。これらの仕組みを「マネージメント」と総称し、本分野では次のような領域において研究を展開しています。

- (1) 個々の情報メディアとその集積に対する分析、評価、組織化、活用を図る領域
- (2) 情報メディアとその集積を核に、研究者や児童など特定のユーザ層に有効なサービスを計画し、構成する領域
- (3) 大量の情報メディアの集積をベースとする図書館や情報センターの組織、経営、制度に関する領域

★★人材育成方針

専門的な知識・技能を備えた上で管理・運営に携わることができる人材の育成をめざしています。

- (1) **図書館や情報センターの管理・運営を担う人材：**
図書館等の人材・予算・施設設備を適切に管理し、サービスの質を評価し、新たな計画を策定する
- (2) **情報メディアの収集・組織化・提供を担う人材：**
データベースの構築や、図書館におけるコレクション構築等に必要の情報メディアを収集・組織化し、利用者の要求に適するかたちで提供するシステムやサービスを構成する
- (3) **情報管理・情報分析を担う人材：**
企業や官公庁など多様な組織における情報の蓄積・管理を実行し、また情報分析に基づく企画・立案を行う
- (4) **教育・研究・開発に携わる人材：**
大学等の教育研究機関において、情報メディアとそのマネージメントにかかわる教育・研究・開発を行う

教員紹介

(★は2013年3月31日退職予定)

いけ うち あつし
池内 淳
図書館情報学

日本の公共図書館政策に関する規範的・実証的研究を行っています。たとえば、1) 自治体における公共図書館サービスの最適供給、2) 図書館の最適規模、3) 現在における図書館の公共性の再定義などです。

いち かわ えり
市川 恵理
公共図書館政策

生涯学習・社会教育領域を中心とした公共サービスに関する国の制度や教育委員会制度の現状等を踏まえ、「新しい公共」推進の観点も含め、国・地方公共団体による図書館政策の成果と課題、今後求められる取組などについて研究を進めていきたい。

いっ むら ひろし
逸村 裕
学術情報流通論, 学術図書館論, 情報探索行動論

電子情報環境が急速に進展しつつある中、学術情報流通におけるオープンアクセスや機関リポジトリの展開、大学図書館機能の高度化と経営問題そして情報利用者の探索行動に関心がある。関連して図書館及び大学諸活動の認証評価の問題、情報リテラシーの動向、物理的な資料情報源の保存、情報専門職を研究テーマとして扱っている。

いわ さわ こ
岩澤 まり子
情報組織化論, 情報検索論

データベース資源の特徴を、情報の蓄積および検索の両面から明らかにし、情報資源としての活用について研究を行っている。具体的には、利用者による情報要求、情報検索の機能、提供する情報、情報の蓄積法等を検討し、医療情報、レファレンス経験および特許情報を用いて、情報提供モデルを提案している。

うえ まつ さだ お
植松 貞夫★
建築計画学, 図書館情報学

デジタル情報時代における図書館建築について研究している。知識や情報流通のデジタル化に伴って、館種を問わず、図書館は変化を迫られている。こうした時代にあって図書館と図書館建築は如何にあるべきかを建築を主体に考察する。具体的にはデジタル化への対応先進国である北欧や英国の図書館建築の方向性を把握するとともに、国内における館員や利用者の意識調査を行っている。

おお さわ ふみ と
大澤 文人

教育学

専攻分野は教育学で、教育現場におけるコンピュータの利用（コンピュータによる授業支援、教育評価など）と教育機関と企業の連携に関心をもっている。今後はコンピュータを含めたメディアリテラシーについての教育に関しても研究を行いたいと考えている。

おお ば いち ろう
大庭 一郎

図書館情報学

米国の公共図書館における人的資源管理について、専門的職務と非専門的職務の区別の観点から研究してきた。それらの研究を踏まえて、日本の公共図書館や大学図書館における図書館職員の職務のあり方について研究している。さらに、公共図書館や大学図書館における情報サービスの新たな動向についても研究を進めている。

さん なみ ち ほ み
三波 千穂美

テクニカルコミュニケーション、知識情報学

科学技術と社会という枠組の中で、専門情報を一般市民に正確かつ明解にわかりやすく伝達するための制度・技術について研究している。伝達する相手の状況に配慮した、情報を最適表現するための制度や技術についてとも言えよう。具体的にはテクニカルコミュニケーション、サイエンスコミュニケーション関連のテーマなどがあげられる。

すず き か なえ
鈴木 佳苗

社会心理学、教育学、社会情報学

児童青少年の活字メディア、映像メディア、電子メディアの利用実態とメディア利用が児童青少年の発達に及ぼす影響に関する研究を行っている。活字メディアとしては、図書、新聞、マンガなど、映像、電子メディアとしては、テレビゲーム、テレビ、インターネットなどが含まれる。影響の内容としては、学力的側面と対人的・心理的側面について広く検討している。

た むら はじめ
田村 肇

図書館情報学、計量経済学

公共図書館の利用（特に貸出し）の量がどのような要因によって決まるのかを計量的な（統計的な）手法で明らかにする研究を行っている。また、それから派生してどのようにすれば図書館の効率性を測定することができるかを明らかにするための研究も行っている。今後は公共図書館に限らず図書館情報学、情報学分野における様々な数理的・計量的分析を行っていきたい。

つじ けい た
辻 慶太

自然言語処理、図書館情報学教育

現在、次の2つの研究に取り組んでいる。1) 翻訳や文章作成に有効な訳語対、同義語、上位語下位語を Web から自動抽出する手法の開発、2) 電子環境と多様な雇用形態が増えている現代社会での図書館員教育のあり方

とし もり おつし
歳森 敦

行動モデル

コミュニティの知的基盤としての地域公共サービスと地域施設、特に図書館や情報センターを対象として研究する。地域間の格差のような広域的な視点から、施設単体の評価あるいはサービスに対する利用者の選好のような微視的な視点までを総合し、サービスや施設の運営・計画に資する知見を得ることをめざす。

の もと ゆう じ
野本 祐二

地方行政制度、公共経営論

主要な研究テーマは、我が国の地方行政制度である。特に、市町村合併、地方分権の進展、新しい公共等地方自治体を取り巻く環境が大きく変わりつつある中、地方自治体において導入されている政策評価、PFIなど、民間企業における経営理念・手法を行政現場に適用する新しい公共経営（NPM）について研究する。

ひら く え ゆう じ
平久江 祐司

図書館情報学、学校図書館

学校図書館の活動および学校図書館と公共図書館の連携・協力に関する領域について、教育学的側面から研究を行っている。具体的な研究テーマとしては、主として日本および米国の学校図書館の支援システム、学校図書館活動の評価、情報リテラシー教育、利用者への情報提供などがあげられる。

まつ ばやし まみ こ
松林 麻実子

情報行動論, メディア分析

主たる関心は、社会情報学的な観点から情報を利用する人間について考えることにあり、具体的には二種類のアプローチを採用している。ひとつは、人間が日常的に行っている情報行動は彼らにとってどのような意味を持つのかという疑問についてフィールドワークを使って解明することである。もうひとつは、人間と情報とが関わる際に必ず存在するメディアに焦点を当て、その構造と情報行動との関わりを解明することである。

みどり かわ のぶ ゆき
緑川 信之

図書館情報学

分類理論の研究を行っている。これまで、図書を書架に配架するための分類（書架分類）を中心に研究が行われてきているが、これは一次元的な配列しか考慮に入れていない。しかし、電子資料などは必ずしも一次元的に配列される必要はない。こうした点をふまえ、従来の図書館分類法の構造等を明らかにするとともに、より一般的な観点から目的に応じた分類法のあり方を研究する。

み ない ひで き
葉袋 秀樹 ★

図書館情報学, 公共図書館論

わが国の公共図書館について、その理念・目的、サービス方法、利用傾向、経営・管理、職員の専門性・教育、法令・制度、行財政、政策等を、地域社会や自治体行政との関係の観点から研究している。これまでの主な研究は、専門職員の職務内容・資格・資質、利用者サービスの改善、図書館行政と図書館運動の評価である。

よし かね ふゆ き
芳鐘 冬樹

計量書誌学, 計量情報学

ビブリオメトリクスに基づく学術コミュニケーションの分析と、自然言語処理技術を応用した知的情報検索システムの構築に関する研究を行っている。現在の主たる研究関心は、1) 共同研究ネットワークと研究者の生産性との関連、および、2) 専門用語の異形認識を応用した、シラバスの検索・分類手法の開発である。

よし だ ゆう こ
吉田 右子

図書館情報学

主たる研究テーマ:(1) 生涯学習の場としての北欧公共図書館の機能に関わる実証的研究、(2) アメリカ公共図書館の理念および実践にかかわる歴史的研究、(3) 日本における地域住民と公共図書館の関係性にかかわる理論的研究

パトリック ロウ
Patrick Lo

Comparative study of library and information science

The Comparative study of public library designs, services and as a public space - and their relations in creating a literate environment.
The role of school or teacher librarians, current popular culture and school libraries. The contributions of a school library to the overall improvement of the teaching and learning of English language.



メディア利用・メディア教育の影響に関する研究

家庭や学校へのメディア普及が進み、私たちは多くの時間をさまざまなメディアとともに過ごしています。このようなメディア利用は私たちにどのような影響を与えているのでしょうか？

鈴木佳苗研究室では、この身近な問いの答えを探求しています。また、メディアの影響研究の結果を参考にして、メディアの悪影響をできるかぎり低減し、よい影響を高めることができる新しい授業を考案し、その効果を検討する研究などを行っています。

■ 研究紹介 1：メディア利用の影響（1）

小・中学生を対象として、読書が共感性などに及ぼす長期的な影響について検討しました。

一般的に読書は子どもたちの発達に良い影響を及ぼすと考えられていますが、図1のように、本のジャンルによって悪い影響が見られる場合もあることが分かりました。

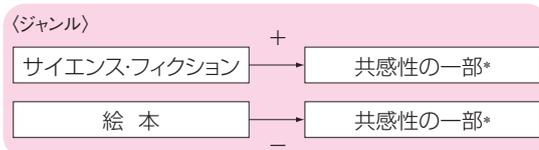


図1 中学生における本のジャンル別の読書量と共感性
(注: * 仮想の状況・場面に自分を置き換えて想像する傾向)

■ 研究紹介 2：メディア利用の影響（2）

小・中学生を対象として、テレビ番組の暴力描写が暴力行為への規範意識（暴力行為をどのくらい悪いと思うか）に及ぼす長期的な影響について検討しました。

一般的にテレビ番組の暴力描写の視聴は子どもたちの発達に悪い影響を及ぼすと考えられていますが、図2のように、暴力描写の内容によって、よい影響が見られる場合もあることが分かりました。

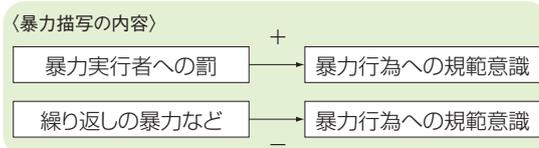


図2 小学生におけるテレビ番組の暴力描写の視聴内容と暴力行為への規範意識

■ 研究紹介 3：メディア教育の効果

高校生を対象として、(1) メディアが伝える情報の読み解きや、(2) 携帯依存の予防のための授業案を作成して実施し、その効果を検討しました。その結果、(1) メディア教育の授業を受けたグループではメディア・リテラシーの一部が伸びた、(2) メディア教育の授業を受けたグループでは携帯依存が低くなったことなどが示されました。

現在は、インターネット上の対人問題の解決や予防に役立つ教材の開発も行っています。

(http://www.jsps.go.jp/j-jisedai/data/life/LZ002_outline.pdf)。

■ メディアの影響研究、メディア教育研究の今後の展開

メディア利用の影響は、上記の研究に見られるように、よい影響、悪い影響の両方があり複雑です。日常生活にメディアが浸透している現在、メディア利用のよい影響と悪い影響を予測する要因を発見し、この要因をメディア教育に組み込んでその効果を検討していくことは、学術的な意義だけでなく、社会的な意義とも言えます。

上記の研究以外に、現在、携帯電話やパソコンからのインターネット利用が青少年の社会的行動に及ぼす影響、読書の影響、デジタル教材を使用した授業の影響に関する研究などにも取り組んでいます。



写真：ゼミ室の様子

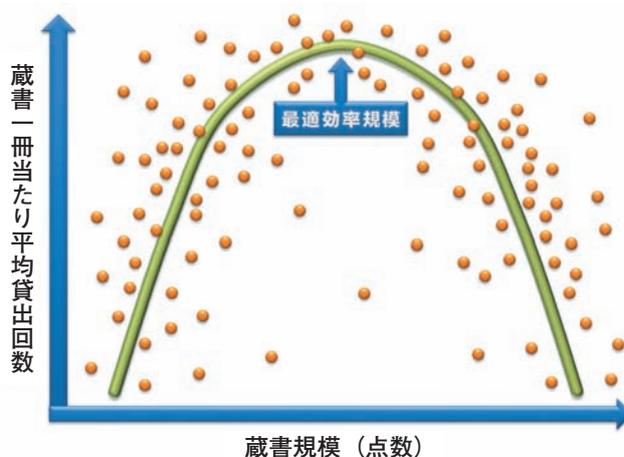
公立図書館政策に関する定量的研究

■ 概要

現在、日本には、約 1,700 の自治体が存在し、3,000 以上の公立図書館（Public Library）が設置・運営されていますが、図書館はそれぞれ、量的にも質的にも様々に異なっています。自治体を取り巻く環境の変化と情報メディアの多様化の中で、図書館をどれだけ設置し、どのように運営することが、社会的厚生という観点から、より望ましいのかについて、種々の定量的研究を行っています。

■ 公立図書館の最小効率規模に関する実証的研究

一般に、図書館や書店は大きければ大きいほど良いと考えられていますが、財政的制約、あるいは、効率性という観点からは必ずしも支持されません。これは自治体の人口規模についても同様のことが言えますが、一定の水準までは「規模の経済（スケールメリット）」がはたらいて効率的になるものの、ある水準を超えると、再び非効率になっていく現象がしばしば認められます。そこで、図書館の効率性を代表する様々な指標を用いて、図書館の最適な規模を定義しました。



■ 公立図書館の費用便益分析

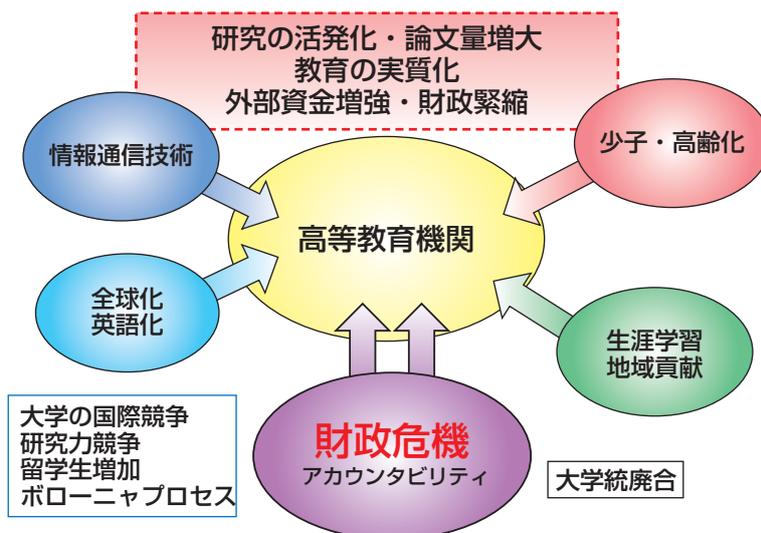
自治体が図書館を設置すべきか否かの意志決定は、本来、図書館が存在し、それを利用することによって得られる住民の便益（利益）が、その図書館を設置・運営するための費用（初期投資+運営費用）よりも大きいかどうかを予測することによってなされることが望ましいのですが、図書館は基本的に無料で利用できますので、住民がどのくらいの便益を得ているのかを測定することが困難です。一方、市場で取引されない（価格を持たない）希少価値のあるもの（非市場財）は数多くあります。例えば、環境資源、公衆衛生、家庭内での教育、ボランティア活動などです。そういった非市場財の価値を測定するための手法を公立図書館サービスに適用して、公立図書館の便益を測定しました。

公立図書館における借覧と来館に対する支払い意思額

	S図書館		Y図書館	
	借覧	入館	借覧	入館
有効回答数	670	683	862	876
平均値	¥127	¥127	¥82	¥107
最頻値	¥100	¥100	¥50	¥100
最大値	¥5,000	¥5,000	¥5,000	¥3,000
最小値	¥0	¥0	¥0	¥0

学術情報基盤としての大学図書館に関する研究

逸村研究室では大学図書館、情報環境と高等教育機関に関わる情報活動を対象に研究活動を行っています。電子情報環境が急速に進展し、高等教育機関が下記に見られるような多様な環境の変化におかれている今日、様々な活動を支援するために大学図書館は幅広い活動が求められています。



■ 大学図書館の学習・研究支援、社会貢献

今日の情報環境下において、大学図書館は「館」に閉じこもったサービスだけではその目的を達成することはできません。ボローニャプロセスに代表される国際的な高等教育状況の変貌にどう対応するか、電子ジャーナルや電子ブックをどのようにサービスに取り入れるか、機関リポジトリ構築を通じて大学のアカウンタビリティをどう高めるか、利用者の情報利用行動に対応した効果的なサービスの提供、これらはどれも現代大学図書館の課題です。さらにシリアルズクライシス、オープンアクセスといった学術情報流通の課題に対応することが求められています。

■ 現在の研究課題

オープンアクセス運動と機関リポジトリの展開とその利用実態、ラーニングコモンズに関わる運営と評価指標、大学図書館機能の高度化と経営問題、そして情報利用者の探索行動等をテーマに研究を進めています。関連して図書館及び大学諸活動評価の問題、情報リテラシーの動向、物理的な資料情報源の保存、情報専門職の問題を研究課題としています。



情報メディアシステム分野

★研究対象

現代社会における知識共有はコンピュータとネットワーク技術が欠かせません。今日もまた人々は PC や携帯電話などの情報機器を操作し、ネットワークにアクセスします。このような行動を当たり前にしたのは多くの情報通信技術を開発し、社会基盤として整備した先人たちの努力です。情報メディアシステム分野は、先人たちの努力を引き継ぎ、さらなる高みをめざします。

われわれが研究対象とするのは「知識共有基盤」です。人の意識や社会的行動と結合させ、そこに作用する技術世界を対象とします。

大規模データを収集し、相互に関連付けられた構造化文書として蓄積します。そこに人のコミュニケーションや意味理解を考慮して、新しい情報アクセス技術を開発します。蓄積された構造化文書はやがて、新しいアクセス技術とともに共有可能な知識資源となり、デジタルライブラリのような知識サービスを形成します。このように、単なる技術開発にとどまらないところが他の技術系の大学院と違う点です。

★★人材育成方針

まず意識しているのは、学会発表や国際会議、学術雑誌への投稿を積極的に推奨しているところです。研究室だけで議論していると、視点が偏り、都合のよい結論を導きがちです。外で発表を行い、他流試合を行うことで、自らの研究を客観的に眺められるようになります。また、外部の批判を意識することで、研究室の議論もより真剣に行うようになります。その結果、常に最先端のレベルを維持できます。

もうひとつ意識していることは、図書館情報メディア研究における技術とは何かを考えることです。とかく研究は近視眼的になりがちです。自分の研究に没頭するのはよいのですが、そのテーマが何のためにあるのか、その位置づけはどこにあるのかを合わせて考える必要があります。博士後期課程ではもちろんのこと、前期課程においても自らの研究がその領域を定義づけ、発展させることを意識するべきです。図書館情報メディア研究というオリジナリティあふれる領域を意識することで、自らの研究も輝くのです。

教員紹介

うだ のり ひこ
宇陀 則彦

情報資源管理, 電子図書館

1) 学術情報リンク：知的生産に必要な学術情報をリンクし、最適なパスを提供する。
2) 情報資源共有：図書館、博物館、文書館などの情報資源を透過的に利用できるようにする。
3) 資料研究支援：コンテンツを再構成することによって資料の新たな側面を引き出す。

さか ぐら てつ お
阪口 哲男

情報科学

1) デジタル図書館基盤技術：デジタル図書館の構築やサービスの展開に適応した基盤技術の開発；2) 分散型情報システムとその開発環境：WAN や LAN に分散した情報の特性に基づくシステム構成方式とその開発；3) 知的活動のための情報基盤：研究・教育における情報の蓄積・加工・利用のための手軽なソフトウェア環境の構築

さ とう てつ し
佐藤 哲司

情報アクセス論, データ工学

情報ネットワーク時代の本格的な到来を迎えて、相互に関連づけられた情報空間の構造を知識として表現し、変換・統合・共有・アクセスするための情報アクセス高度化、知識画像に関する研究を進める。情報を発信する著者コミュニティの変遷・変容にも興味があり、データ工学や情報検索などの工学的アプローチによって解明する。

しず め こう すけ
鎮目 浩輔

量子計算, 統計的機械学習

量子計算：微視的な物体は「量子力学的な性質」を持ち、うまく利用したアルゴリズムを見つけられれば通常の計算機よりも本質的に速い計算が原理的に可能であることが知られている。それを主に幾何と最適化の手法を利用して探す研究を行っている。
統計的機械学習：特にガウシアンプロセスを用いた回帰とその応用。

鈴木 伸崇

構造化文書, データベース

XML 等の構造化文書に関する研究を行っている。たとえば、スキーマ進化に伴う XML 変換アルゴリズムの開発、XPath 充足可能性問題を解くための効率のよいアルゴリズムの開発を行っている。また、それら問題の計算複雑さについても考察している。

関 洋平

自然言語処理, 情報アクセス技術

書き起こされたテキストに現れる、人対人のコミュニケーション過程の理解を目指している。その基礎技術として、意見分析、要約、多言語処理に力を入れている。最近、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を対象とした意見・体験情報の詳細アノテーションや、言語または文書ジャンルを横断した情報アクセス技術の開発に取り組んでいる。

手塚 太郎

情報検索, 統計的言語モデル

情報検索システムを高度化させるために、言語の意味構造を確率モデルとして表現し、大量の文書集合から学習させる手法の研究を行っている。画像・空間情報・時系列データなど、多様な非記号的情報が急速に増加を続けているが、それらと言語的・記号的情報を横断した検索システムの構築に取り組んでいる。

時井 真紀

計算物理

磁性材料の理論計算の研究を行っている。1) 強磁性金属、酸化物の電子状態の計算 ; 2) 理論計算から得られた結果の可視化

長谷川 秀彦

ハイパフォーマンスコンピューティング, 数値線形代数

1) 数値線形代数: 科学技術計算に現れる大規模な疎行列に対する連立一次方程式の解法や固有値計算のアルゴリズムの開発・評価 ; 2) ハイパフォーマンスコンピューティング: 並列コンピュータやインターネット上で手軽に利用できる高速な数値計算ソフトウェアの開発とその性能評価 ; 3) 数値計算ソフトウェアの応用: たとえばコンピュータ教材の作成やデータマイニング

松村 敦

情報学

自然言語処理を利用した情報アクセスおよび情報検索に関する研究を行っている。具体的には、自然言語で書かれた文書からキーワードとそれらの関係を抽出し構造化する方法、構造化された言語情報を情報アクセスシステムに活用するための枠組みの研究を行っている。

松本 紳

計算物理, 計算機実験

物性物理の理論的研究とそれに関連するバンド計算システム等の開発を行う。具体的には以下のとおりである。1) 磁性媒体材料等に対する計算機実験 ; 2) 理論あるいは実験結果等の可視化のためのシステム開発 ; 3) 陽電子消滅角相関やコンプトンプロフィールの理論的研究

森継 修一

情報科学

情報システムのひとつとしての数式処理システムの機能を高度化するため、基本となるアルゴリズムの研究を行なう。自然科学の立場から、数学的な基礎理論に基づいて計算のメカニズムを明らかにすることにより、さらに効率のよいアルゴリズムの開発をめざすとともに、実際のプログラム開発と実験的検証までを行なう。

若林 啓

機械学習, データマイニング

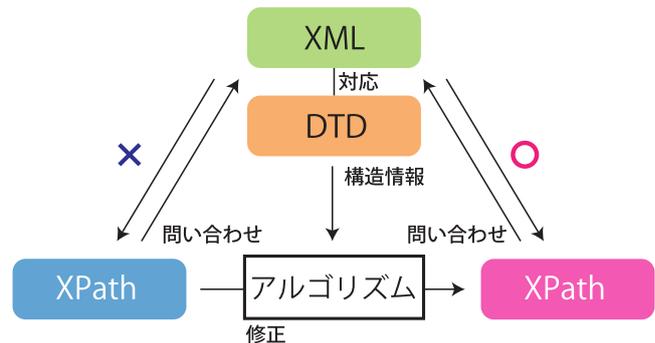
大規模に蓄積されたデータの背後にあるパターンを認識し知識を獲得する機械学習技術の研究を行っている。また、系列情報のダイナミクスを捉える確率モデルの学習手法に基づいて、言語データや時系列データを対象としたデータマイニング技術の開発に取り組んでいる。

Web上のデータと構造化文書に関する研究

Web 上では大量のデータが生成・蓄積され続けています。データの構造も複雑化しているため、これまでの手法では、このような大量かつ複雑なデータを効率よく管理したり必要な情報を取得したりすることが難しくなっています。当研究室では、Web 上の標準的なデータ形式である XML や HTML について、それらデータに対する新しい管理・問合せ手法やユーザ支援などについて研究を行なっています。

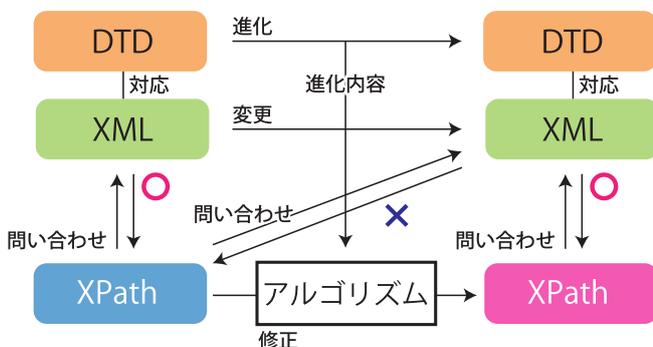
■ 誤った問合せ式を自動的に修正する技術

データに問合せをする際「問合せ式を書いて実行してみたものの、期待した実行結果が得られずどう修正していいかわからなかった」というご経験はないでしょうか。当研究室では、XML の標準的な問合せ言語である XPath を対象に、XML の構造に沿わない XPath 式を正しい式に自動修正するアルゴリズムを開発しています。構造的に正しい XPath 式は通常複数存在するので、ユーザの記述した式に近いものから順にユーザに提示し、希望の式を選択できるようにして利便性を高めています。



■ データ構造の変化への対応

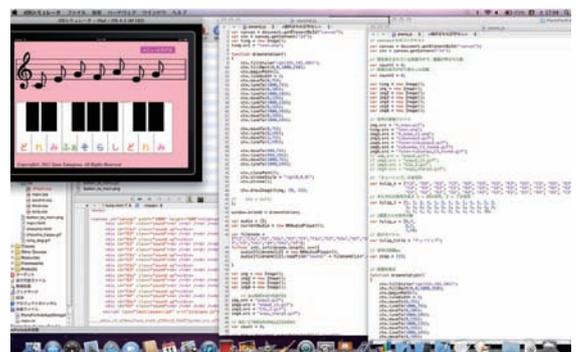
一度作成されたデータが元の構造を保持し続けることは稀であり、ユーザの要求や利用環境の変化に応じて更新されていくのが一般的です。データの構造を更新する場合、通常、データ構造の定義（スキーマ）をまず更新しそれに応じてデータを変換します。しかし、スキーマと比べてデータの量は極めて多いため、データの変換には非常に手間がかかります。そこで当研究室では、スキーマの更新内容に応じてデータを自動的に変換するアルゴリズムを開発しています。また、複雑なスキーマから更新内容を適切に抽出し利用者に提示するアルゴリズム、スキーマの更新に応じて XPath 式を自動的に修正する手法などについても研究しています。



■ その他

上記のほか、XPath 式の充足可能性問題といった基礎理論系のテーマから、HTML5 を用いた iPad アプリの開発まで、XML や HTML に関する研究を幅広く行なっています。

当研究室の Web ページは <http://nslab.slis.tsukuba.ac.jp/> です。ご出身の分野を問わず、意欲のある方のご参加を歓迎いたします。



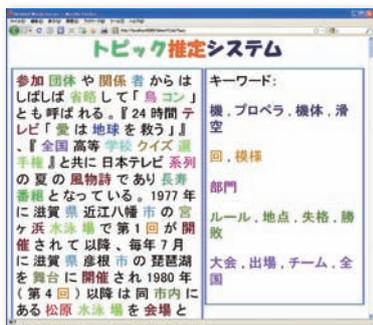
データからの知識獲得

電子書籍やデジタルライブラリ、ウェブ上のコンテンツなど、電子的な文書の蓄積が急速に進んでいます。これらのデータを人間が読むのではなく、計算機に読み込ませ、知識を獲得させることで、情報検索や情報推薦など、幅広い応用が可能になります。適切な知識獲得のためには計算機が言葉の「意味」を理解しなくてはなりません。データ自体を利用して意味を学習させる統計的言語モデルという手法を使い、データから知識を取得するシステムを構築する研究を行っています。

統計的言語モデル

計算機が文書から知識を獲得するというのは、与えられたデータのすべてを記憶するのではなく、内容を要約し、全体の傾向を簡潔にまとめた構造として捉えるということです。統計的言語モデルではこの構造を確率的なものとして捉え、文書における単語の出現が従う離散的な確率分布のパラメータを機械学習によって推定します。

モデルにはデータとして観測されない潜在的な「意味」を表す変数を加えることもできるため、これを用いて文書間あるいは文書とクエリの意味的關係が推定できます。



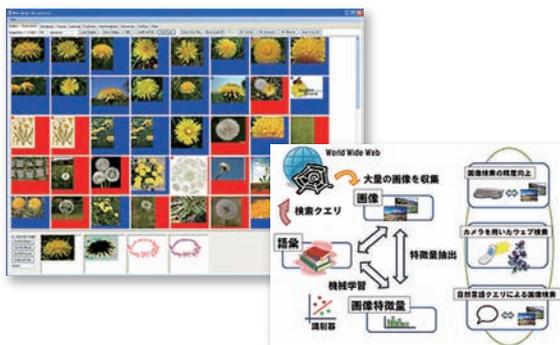
ライフログ検索システム

日常会話には時折大変面白い話題が出るがありますが、記録を取っていないと忘れてしまいます。残念な思いをしないで済むように、会話の内容を記録し、後から再利用できるようにするシステムを開発しています。実用的な検索機能を実現するには音声認識の精度向上が必要です。統計的言語モデルを用い、音声認識エンジンに単語間の意味的距離を計算させ、音韻的には似ているが意味的には関連性が薄い認識結果を検出し、修正させる形で改善を図っています。



意味を考慮した画像検索

従来の画像検索システムでは色彩や形状の類似に基づいて検索を行っていましたが、「何が映っているか」という意味を統計的な手法で推定した上で検索を行うことで、より精度の高い検索システムを目指す研究を行っています。



ローカル情報検索

特定の空間領域を対象としてウェブ検索を行う地域情報検索（ローカル検索）のシステムが近年、大きな注目を集めています。ユーザが入力したクエリに特に関連が深い地域を提示するなど、新たな形で地域情報検索システムを開発しています。



明日の私をつくるシステム - Mission Passion Revolution!! -

図書館とウェブはどちらにも膨大な量の情報が存在します。その中からユーザが求める情報を簡単に入手し、便利に楽しく活用できるよう、様々なアプローチから研究を進めています。システムの開発はもちろんのこと、ユーザ評価や分析も積極的に行い、真にユーザに求められるサービスの実現を目指しています。さらに、私たちの活動は研究室内だけに留まりません。学園祭では附属図書館と共同で「近未来書籍空間」を実施し、2年連続で雙峰祭グランプリ最優秀賞を受賞しました。このように私たちは常に新しいことにチャレンジし、未来を創造しています。

電子図書館



実世界指向ディスカバリサービス
検索結果と物理的配置の結合

インターフェース



Webキュレーションシステム
表紙が彩る新しい情報空間

ソーシャル



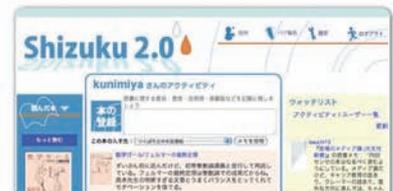
ソーシャル絵本推薦システム
子ども1人ひとりに合った本を



古典籍の知識構造を起点としたアクセス
最適なアクセスパスの提供



自分のWeb探索の課程が見える
履歴可視化インターフェース



読書コミュニティを育てる
ユーザ推薦技術の開発

学術情報と人をつなぐためのシステム基盤の構築や、図書館内やOPACでのユーザ行動の調査・分析を行っています。

情報をわかりやすく、魅力的に見せるためのインターフェースについて研究しています。システムとユーザとのより良いインタラクションを追求しています。

人と人とのつながりをつくり、それを活用することで、機械的な処理だけでは実現できない新たな価値を創出します。

近未来書籍空間

附属図書館と共同で実施した学園祭企画です。オブジェを用いた読書空間の演出や、いかに面白く本を紹介できるか競うビブリオバトル、AR技術を用いた読み聞かせなど、様々な企画を行いました。2000人を越える方々にご来場頂き、昨年に続いて雙峰祭グランプリ最優秀賞を受賞することができました。
※詳細は学生活動ページをご覧ください。



<http://niccoli.slis.tsukuba.ac.jp/>

人と情報をつなぐ情報アクセス技術の研究

■ コンテンツ工学領域の開拓

ウェブやブログなど新しいメディアの登場は、情報共有のパラダイムを大きく変容させています。私たちの研究室では、日常生活の様々な局面で生成される知識や情報をマイクロコンテンツとして捉え、コンテンツ間のネットワーク（関係性）を編纂、流通・利用する情報共有プロセスの核となる情報アクセス技術の高次化と、人とコンテンツの相互作用（インタラクション）の高度化の両面から取り組み、情報大航海時代における情報との新たな関わり方を提案します。

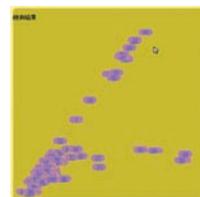
情報ネットワーク

雑多な記事が混在する集合を対象とする探索では、記事間に意味的な関連を持たせることが有効です。記事中から抽出した語の共起関係からネットワークを構築（下図）し、記事空間を渡り歩き（dicing）ながら、興味ある話題を深掘り（drilling）できる方向感のあるナビゲーションの実現を目指しています。

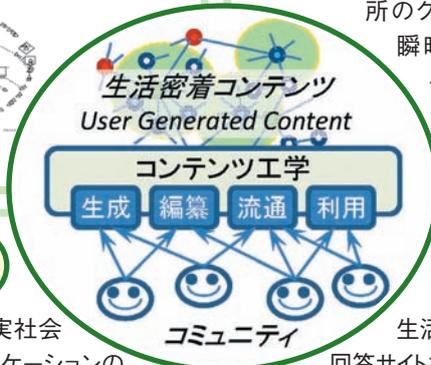
消費者が投稿する商品レビュー記事は購入のヒントとして有効ですが、様々な観点（評価視点）で書かれています。良かった、役立つなどの評価表現や、操作性、デザインなどの評価軸を手がかりにレビューを編纂・クラスターリングするテキストマイニング技術にも取り組んでいます。



情報インタラクション



ユーザが求める情報を的確に探す方法を研究しています。検索結果を二次元平面に展開（左図）することで、記事間の関連を視覚的に捉え、そこから新たな検索を繰り返す方法や、個人の検索履歴から次の検索を推定する方法など、ユーザとシステムが協調したインタラクティブな検索システムを研究・開発しています。一方、生活をしながら情報に触れるながらアクセスの機会も増えています。検索結果を1行1件に圧縮表示する手法（右図）の考案や記事中の有用な箇所のクリッピング法など、瞬時に情報を把握する技術にも精力的に取り組んでいます。



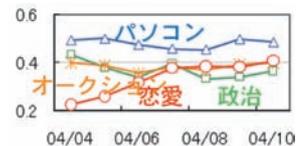
コミュニケーション理解

コミュニケーション理解研究室では、実社会での言語の使われ方を意識し、コミュニケーションの支援や、情報の分析・発見といった応用につなげることを目標として、研究を進めています。具体的には、雑多な情報から、利用者が必要な情報にアクセスする技術や、人間の言語理解を反映した応用の実現を目指しています。現在の学生の研究テーマとしては、機械翻訳とその評価、文書分類技術の背景にある学習理論の改善、有害情報のフィルタリングなどを検討しています。



ひとネットワーク

生活の中で生成され共有されるブログや質問回答サイトなどは、膨大な数の参加者で形成されています。コミュニティに参加する個人の役割や貢献度を、HitsやPageRank等のアルゴリズムを援用して明らかにする手法を研究しています。質問回答サイトで率先して回答する参加者の比率は時間経過とともに一定値に収束する性質の解明（下図）や、回答者の連鎖から求めたスコア（QARank値）でコミュニティを性格付ける方法など、コミュニティの発展過程の解明、賑わい感や活性度の向上法などコミュニティの健全な成長につながる研究をしています。



情報メディア開発分野

★研究対象

ネットワーク情報化社会の進展によって、私たちは非常に多くの情報を、多様な形態で発信し、流通させ、利用するようになりました。情報メディア開発分野では、さまざまな情報メディアを利用してネットワーク情報環境をより先進的なものとし、私たちの生活をより豊かなものにするを目的とした研究を進めています。本分野では、各種メディアを利用した情報表現技術と表現物の制作方法に関する領域、各種メディアを介した人間とシステムのインタラクションに関する領域、人間の視覚や認知に関する認知心理学領域、音楽や音声、画像などをコンピュータで分析・認識する認知科学領域、ネットワークメディアを利用したサービス創出に関する領域、ネットワーク上での効率的な情報流通、管理、利用に関する領域など、多様な研究領域をカバーしています。

★★人材育成方針

情報メディア開発分野では、個々の学問分野での研究を発展させると共に、それらを学際的、統合的に学べる環境を提供しています。研究室は概ね数人程度の少人数構成ですので、指導教員の元で、専門分野における深い知識と研究遂行能力を身につけると共に、問題発見能力・問題解決能力など将来にわたるスキルを習得できます。進化した情報化社会で十分に役立つ先端的知識や技術を身につけることは、大学学部レベルの4年間だけでは中々困難です。大学院では、先進技術を深く理解し、自らの研究テーマとして進展させる能力を習得した、情報化社会の将来を担う人材を育成します。

教員紹介

(★は2013年3月31日退職予定 *は連携教員)

いのうえ とも お
井上 智雄

情報工学、教育工学

人と人とのやり取り（ヒューマンインタラクション）は、人間の最も基本的な活動であると同時に、あらゆる社会活動の基礎です。テーブルを囲んでの作業、ネット上の人のつながり、廊下の立ち話など、様々なヒューマンインタラクションの仕組みを先端技術によって調べ理解したり、ヒューマンインタラクションを支援・拡張する新しいメディアシステムを生み出したりしています。

お がわ けい じ
小川 恵司 *

情報表現技術

出版系の事業領域において組版処理を中心とした CTS（Computerized Typesetting System）全般の技術開発に従事。現在は総合研究所においてEビジネス領域の研究開発を担当しており、主に次世代情報端末などを対象としたテキスト系の表現技術の研究開発を行なっている。

お だか かず み
小高 和己

パターン認識、文字認識

文字・画像の機械によるパターン認識技術の諸プロセスを研究の対象としている。人間が文字を発生する過程を各種センサを用いて直接計測し手書き文字に内在する変形・個性の構造を明らかにすること、複雑な背景中にある文字や図形等を分離する際の文字構造の利用法等について研究している。

か も りゅう いち
加茂 竜一 *

デジタルアーカイブとメディア表現

高度な画像処理技術によるVR表現技術など、将来の様々なメディア表現手法やデバイスに高品質に応用しうるデジタルアーカイブを、コンテンツ表現の視点から考察。素材となる作品が持つ広範な情報を、適切なメディアによって保存・公開するための手法を、実践の蓄積をもとに研究を進めている。

か わら さき まさ とし
川原崎 雅敏

情報通信ネットワーク

実社会と仮想社会を融合する新たな環境を構築するユビキタスネットワークを対象に、社会に役立つ研究をめざしています。1) 生活習慣病管理支援システム（iSMBG）、2) P2P ネットワークの性能向上技術、3) 災害時における電話疎通率向上方式、4) コンテキストウェアネスとアダプテーション技術、等の研究を行っています。

きむ さん て
金 尚泰

グラフィックデザイン、芸術学、VR・ARを用いたコンテンツ制作

コンテンツ開発に必要なとされるデザイン表現・CG 関連先端テクノロジーの応用に関する研究。企画・制作のための造形表現やデザインのあり方を探求する。コンテンツとしての表現可能性を広げることを主な研究テーマとし、ダイナミックでインタラクティブな情報表現について、表現理論・技術などを芸術・デザインの観点に基づいて制作する。

杉本 重雄

デジタルライブラリディ
タルアーカイブメタデータ

ネットワーク時代における知識と情報の共有基盤として重要な役割を持つデジタルライブラリに関心を持つ。その中でも、特にメタデータに関して関心を持ち、XML等のWWWの基盤技術を利用したメタデータのためのシステムの構成方式や、デジタルライブラリやインターネット上でのメタデータ応用システムの研究を進めている。

鈴木 誠一郎

コンテンツ・プロデュース論、
映像・音声における表現

放送、通信という媒体は問わずとも、いまやコンテンツ制作はあらゆるジャンルのテクノロジーを組み合わせ、メッセージを世に問うツールとして不可欠なものになっている。そうした状況を踏まえた上で、主として放送メディアを中心とした映像表現の研究、開発を行なう。またコンテンツ開発における発想法の一つとして、絵画、音楽、パフォーマンスアートといった芸術のメディアからの援用に関する研究も行なう。

田中 和世★

音声・音響情報処理、ディ
ジタル信号処理

音声・音響メディア処理を情報工学的立場から研究している。具体的テーマとしては、1)言語系に共通なユニバーサル音声符号系を用いた音声の符号化・認識・検索、2)音声生成過程のモデル化に基づく声質変換・合成、話者認識、3)環境音や楽曲の分析・認識、音場の局所再生など

中井 央

コンパイラ構成法、プログラミング

近年、様々な要求に対応するために、新たなプログラミング言語を開発することはめずらしくない。また、携帯電話やゲーム機など、汎用のコンピュータ以外のためのプログラミングの要求も大きい。このため、プログラミング言語およびそのコンパイラの構成法について研究を行なっている。

永森 光晴

情報科学

デジタル図書館に関する研究を行っている。具体的には、メタデータの相互利用性や長期保存性を高めることを目的としたメタデータスキーマレジストリの研究や、メタデータスキーマに基づく応用ソフトウェアの構築支援環境の開発を行っている。

西岡 貞一

メディア論、コンテンツ制作

デジタル技術を応用してゲーム、携帯電話に続く新しいデジタルコンテンツの研究に取り組んでいる。実際のコンテンツ制作を通じてバーチャルリアリティ、ウェアブルコンピュータ、ユビキタスコンピュータ等の作り方や楽しみ方について開発を進めている。

平賀 譲

認知科学、人工知能、音楽情
報科学

人間が音楽を聴き、楽しむ背景には、膨大で複雑な情報処理過程が存在している。そのような認知過程、特に高次の構造認識的な面を、コンピュータ上の認知モデル構築を通じて理解・解明することが主要なテーマであり、また音楽情報検索への応用なども取り上げる。ゲーム・パズルの解決過程など、他の認知過程のモデル化にも関心がある。

藤澤 誠

コンピュータグラフィックス技術研
究、物理シミュレーション技術研究

計算機の発達に伴いコンピュータシミュレーションが様々な場面で活用されている。その中でも特に物理法則に基づくシミュレーションに注目し、自然現象をコンピュータ内で再現することで、コンピュータグラフィックスアニメーションやインタラクティブなアプリケーション、拡張現実感などに応用する研究を行っている。

三河 正彦

ロボティクス、インターフェ
イス、ロボットビジョン

ネットワークを介して、人間と人間、あるいは人間と機械間で円滑にコミュニケーションおよび共同作業を実現するには、音声や映像だけではなく、指し示す、触る、動かす等の実世界へ働きかける動作と、それらを知覚する機能の連携が重要である。そこで、ロボティクスを利用した知的システムまたは知的インターフェイスの研究を行っている。

宗村 泉*

印刷メディア表現文化論、
印刷の歴史と表現技術研
究、文化施設の展開と運営

コミュニケーション・メディアの原点でもある印刷メディアの生い立ちから成熟期に至る過程を、文化・技術の両面から俯瞰的に考察。印刷文化とそれを実現した技術の変遷を研究することにより、デジタルメディアの将来の姿をより明確に理解する。また博物館の設立、運営を通じて培った、コンテンツの保存や展示手法、マネジメントなどを実践にもとづいて研究を行っている。

森嶋 厚行

データ工学、データベース

高度計算機ネットワーク環境やユビキタスコンピューティング環境の出現などによる近年の計算機利用パラダイムの変化に対応して、これからの社会に必要とされる高度なデジタルコンテンツ管理、検索、統合、変換等を実現するための先端ソフトウェア技術の研究開発を行っている。主にデータベース関連技術やXML等のWWW関連技術などを用いたアプローチを行う。

森田 ひろみ

実験心理学、認知心理学

心理実験手法を用いて人間の視覚や認知に関する基礎および応用研究を行っている。具体的な研究対象は、視覚的特徴の統合過程、形態情報の脳内表現、視覚的注意、そして手続き記憶の特性などである。またその手法と知識を基に、文章の読みやホームページの閲覧等の認知過程の研究も行っている。

ヒューマンインタラクションを支援・拡張するメディアシステム

人が人とやり取りをするということは、人間の最も基本的な活動であると同時に、あらゆる社会活動の基礎です。この「人と人とのやり取り」をヒューマンインタラクションといいます。テーブルを囲んでの作業、ネット上の人のつながり、廊下の立ち話、などは皆ヒューマンインタラクションです。我々は、「人の共生」を目的として、ヒューマンインタラクション科学を「人と人との相互作用、社会の根源的な活動である協同を研究し、その仕組みの解明を目指すと共に、よりよい協同の形をつくっていかうとする学問」と定義し、ヒューマンインタラクションの先端技術による理解と、ヒューマンインタラクションを支援・拡張する新しいメディアシステムの創造に取り組んでいます。

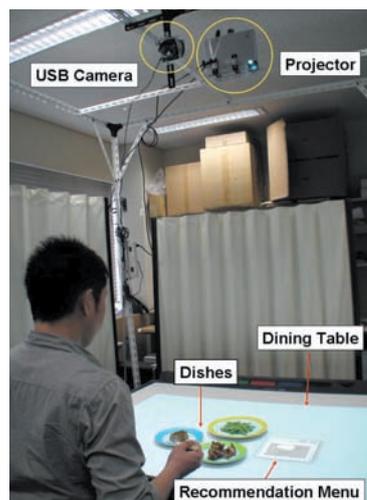
■ Future Dining Table (FDT) :

未来の食卓—

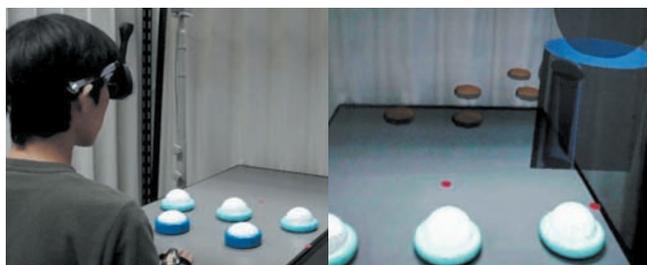
食事状況の実時間認識に基づく追加料理推薦システム

レストランでは、ウェイトラーやウェイトレスが品目の「おすすめ」をしてくれることがあります。一方で、人手不足等でなかなかそこまで至らない店も多くあります。また、多くの品目があって選ぶのに迷うこともあります。

このシステムはそんな状況を助けます。システムが箸を持つ手の動きと皿とをリアルタイムで認識し、現在の食事状況を認識します。これにより、例えば「メインディッシュをほぼ食べ終わったようなので、デザートすすめる」といった、食事状況に合わせた品目の推薦が可能になっています。推薦は直感的に分かるように、テーブル上に画像を表示しています。



■ 直感的に理解できる動作学習メディア



これまで、動作の習得は文章や絵による説明よりも、その動作の「見よう見まね」によって直感的・効果的に行われてきましたが、e-Learning ではうまく扱えませんでした。複合現実感を利用することで、お手本となる人があたかもその場にいるように動作を表示でき、「見よう見まね」の学習を可能にします。

■ 多人数コミュニケーションにおける食事の有無の影響

何かを食べながらの方がそうでないときよりもよいコミュニケーション、スムーズなコミュニケーションだと感じたことはありませんか。

食事をしながらのコミュニケーションは何が違うのでしょうか。発話や身振りを計量した結果、食事によって会話量の均等化が生じていることがわかりました。我々はこれがスムーズと感じるコミュニケーションの正体だと考えています。



見えない物事を見える形へ

インフォグラフィックスとは、複雑な内容やイメージしづらい物事の仕組みなどを、把握・整理し、視覚的な表現で他の人に「情報をわかりやすく伝えるグラフィックデザイン」の事です。絵や図で説明すると、言葉で伝わらないことでも簡単に理解できる。それが、インフォグラフィックスの目的であり、理想であります。

本研究室では、インフォグラフィックスをテーマとしたコンテンツを次々と世の中に発信していきます。

■ 人材育成目標

- コンテンツの企画、制作、評価のできる人材
- 2D、3Dコンピュータグラフィックススキルを持つ人材
- 先端技術の融合に関する新提案のできる人材

Research key word

CLEAR
 ATTRACTIVE CLEVER
 STORY TELLING CLARITY
 TRUE CLEAR RICH BEAUTIFUL FLOW
 SIMPLE DIFFERENT MEANING
 SMART HUMAN
 ELEGANT CONTEXT
 NEW WORDLESS PERFECT
 DEPTH
 +
 3DCG 2DCG VR AR
 REAL TIME INTERACTION

1. Attractive 見る人の目と心を引き付ける

何かに気になり引きつける、共感させる、試してみたいくなるような仕掛けとともに、見る人に直感的に内容を理解させるようなデザインを心がける。

2. Clear 伝えたい情報を明確にする

何を伝えたいのか、何を理解してもらいたいのか、作る側がはっきりしないものを見る側が理解してくれることは絶対にない。

3. Simple 必要な情報だけを明確にする

シンプルにするのは、データだけではなく、色の数、書体、文字数、線、レイアウトなどあらゆる要素を整理することで情報は見やすくなる。

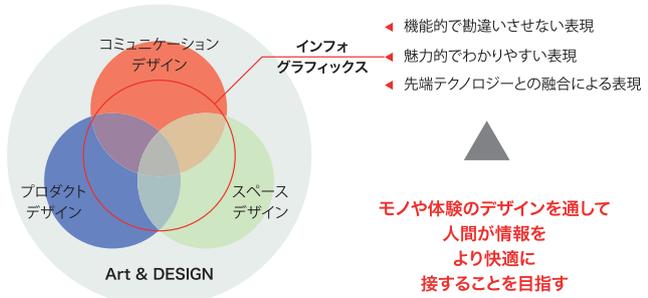
4. Flow 目の流れに沿う

目の動く順番を意識してメイングラフィックスや、データを適切に配置する。もしくは、視線を誘導するための仕掛けを用意する。

5. Wordless 文字がなくても理解させる

文字の説明無しでも理解されるのが理想であり、「伝える」を目的としたデザインにする。

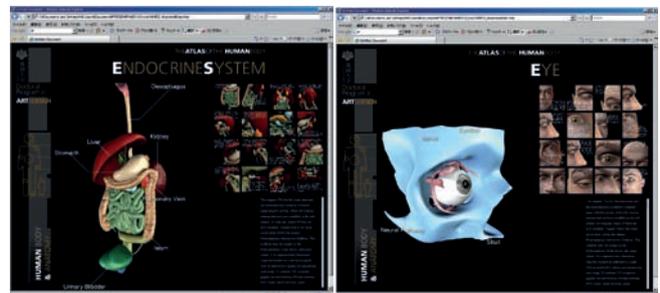
■ 研究領域としての情報デザイン



研究室独自開発3DCG RealTime SOFTWARE/HARDWARE Rendering ENGINE による情報の可視化表現例



骨格シミュレーション (Hardware Rendering Engine)



WEBでのリアルタイムインタラクション例 (Software Rendering Engine)



芸術作品・リアルタイム3D(4K)表現



パッケージデザインシミュレーション

ダビンチのアイディアスケッチのシミュレーション

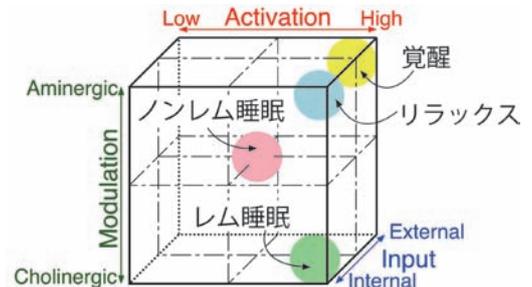
知覚情報、ロボティクスに基づく知能システムの研究

■ 概要

現在のコンピュータは、ディスプレイを利用した2次元平面のグラフィカルユーザインターフェース（GUI）が主流です。本研究室では、コンピュータや知的システムを現実世界に溶け込ませ、より自然な操作やコミュニケーションを実現するために、ロボットを中心とした実世界指向なシステムやインターフェースの構築を目指しています。

■ 人間の睡眠覚醒機能に基づく知覚情報並列処理システムの研究

柔軟な知覚情報処理系を有するロボットを構築するために、人間の意識状態、特に睡眠 / 覚醒状態を数理モデルとして表現する研究を進めています。本数理モデルを利用することにより、覚醒時には外部（視覚や聴覚）情報を主に処理し、睡眠時には内部（蓄積）情報を主に処理したり、処理を休止したりすることができる動的な情報処理系の構築が可能となります。その結果、限られた計算資源を有効に利用することができるようになります。



■ 図書館司書ロボットの研究・開発

図書館利用者と会話することができ、館内の案内や蔵書の検索等の機能を有します。また、たくさんの外界センサを備える図書館司書ロボットの知覚情報処理系は、上記の睡眠覚醒機能に基づき制御され、図書館利用者がロボットの周りに居ない時には、外見上は居眠りをしているように見え、内部では覚醒時に蓄積したセンサ情報等の解析を行うといったユニークなロボットです。限られた計算資源を有効に利用しつつ、居眠りすればするほどますます賢くなるロボットの実現を目指しています。



■ 筋電位信号を利用したヒューマンインターフェース

脳の運動指令が筋肉に伝えられ、筋肉が収縮する際、筋肉上に電気的な信号 = 筋電位信号が発生します。本研究では、皮膚表面から計測した筋電位信号を利用して、ロボットハンドや電動義手などを操作するインターフェースを開発しています。本研究では、サポートベクターマシン（SVM）を用いて筋電位信号から手の動作意図の推定を行っています。



詳しくはウェブサイトをご覧ください。
<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/~mikawa/>

21世紀のメディア環境のテーマは「楽しく、気持ちよく」

映画、物語、音楽、ゲーム、広告といったコンテンツは文化的にも産業的にもその重要性が高まっています。われわれはこのコンテンツの教育・研究に二つのアプローチで取り組んでいます。

- ・ 科学、工学をコンテンツ制作に応用し、表現力や市場の拡大を図る
- ・ コンテンツそのものを対象とした学問体系を構築する

映像、表現、デザインといった技術を学ぶと同時に、これらを統合し実際に利用できるコンテンツを提案・制作します。コンピュータは省力化や効率化だけでなく、人々の生活を豊かにしてくれる道具です。“楽しい”、“きれい”、“ゆかい”、“ふしぎ”を合い言葉に2020年のメディアを一緒に創ってみませんか。

■ デジタルミュージアム

博物館では Virtual Reality や Augmented Reality を用いて古代都市の様子や展示資料の背景を紹介する展示が行われています。デジタル技術を用いて、文化財の持つ魅力や文化的文脈を来館者にわかりやすく伝えようという展示手法はデジタルミュージアムと呼ばれています。われわれは「博物館情報・メディア論」の立場からデジタルミュージアムの研究に取り組んでいます。



大型バーチャルリアリティ映像の評価実験
3DCG キャラクターアニメーションによる群衆表現を応用し、熊本城下参勤交代の「雰囲気」を再現

■ コンテンツの未来

立体映像コンテンツのための表現文法、Facebook や Ustream といった Social Media におけるコンテンツ制作ワークフローの研究は始まったばかりです。

「使ってわかる、作ってわかる」をモットーに実際のコンテンツ制作を通じてデジタルコンテンツの企画、設計、制作、発信、評価等のコンテンツ制作技術の研究を進めています。



立体コンテンツ制作研究
裸眼ディスプレイ方式、ステレオメガネ方式等を各種立体映像技術のためのコンテンツ提案

■ 学びのデザイン

自らの参加、体験により対象への理解を深めたり創造性を高めようという学習手法が注目されています。我々はワークショップとよばれるこの学習手法に着目し、誰もが「映像で表現する力」を身につけるための映像制作ワークショップのプログラムの開発を続けています。



中学生のための映画制作ワークショップ
脚本制作、監督、カメラ、録音、照明など映画作りに必要な役割をのべ18日間一夏をかけて体験

研究科の活動

情報学の教育研究の新しい潮流を探る国際連携

国際的なコミュニティと連携した教育研究活動は欠くことができません。特に、ネットワーク情報化社会に向けた新しい教育研究におけるグローバルな潮流を知り、また私たち自身がグローバルなコミュニティに対して発信していくことが求められています。国際的な連携を進めるために、図書館情報メディア研究科では、海外の大学や図書館との交流協定を結び、研究者の交流を進めてきています。

以下に述べるように、本研究科では、伝統的な図書館情報学を基礎にしつつ、その枠にはとらわれることなく、新しい情報学の教育研究の新しい潮流を国際環境の中でつかむ努力を続けてきています。

インターネットの爆発的な発展にともなう情報環境の大きな変革に従う形で、北米の有力な図書館情報学の大学院では、伝統的な図書館情報学の枠組みからネットワーク情報化社会を志向した Information School へのシフトが進められてきました。Information School というのは、従来の図書館情報学や情報科学・工学、経営情報学といった枠を越えて、情報と人を結ぶ、あるいは情報を介して人と人、コミュニティとコミュニティを結ぶための学問領域の研究教育を行う大学院や学部を意味します。本研究科でも、こうした新しい情報学教育研究の潮流をいち早く取り入れてきました。そのひとつとして、数年前からアジア太平洋地域における情報学領域の高等教育機関の連携組織作りの努力をしてきました。2008年12月には、Consortium of Information Schools in Asia-Pacific (CiSAP) を設立しました。CiSAP 設立時の、10カ国15大学の中で本研究科は中心的な役割を果たしています。

図書館情報メディア研究科と韓国釜山大学文献情報学科との国際協力協定に基づいて、中国人民大学情報資源管理学部も含めた3校の合同で、2008年以来コンファレンスを開催しています。2011年には中華人民共和国において、「情報資源のデジタル化：現状と今後の方向性」というテーマで開催し、本研究科からは緑川教授と宇陀准教授が発表を行いました。



図書館情報学図書館の貴重資料と大型コレクション

■ 百万塔及び自心印陀羅尼

百万塔陀羅尼は日本における現存最古の印刷物です。『続日本紀』などによれば、奈良時代に藤原仲麻呂の乱が平定された(764年)後、称徳天皇の発願によって小さな三重の木製塔が百万基つくられ、それぞれに無垢浄光大陀羅尼經のうち、根本、相輪、自心印、六度のいずれかの陀羅尼(呪文)が納められ、法隆寺などの諸寺に寄進されました(770年)(所蔵は自心印陀羅尼。[写真])。このとき奉納された印刷物が百万塔陀羅尼と通称されるものです。使用された紙は麻や楮から作られたものです。書誌学などの研究成果によれば、印刷方法は木版あるいは銅版によるという二つの説があります。日本における現存最古の印刷物が仏教と深いかかわりをもって製作されたことは、当時の社会や文化とあわせて考える必要があります。



■ グーテンベルク 42 行聖書零葉

グーテンベルク(Johannes Gutenberg, 1400頃-1468)は15世紀半ばに金属活字による活版印刷術を開発しました。『42行聖書』はグーテンベルクがドイツのマインツで印刷したとされる聖書であり、2段組みで1段がおもに42行となっています。『42行聖書』にはヴェラム(羊皮紙)に印刷されたものと、手漉き紙に印刷されたものがあり、図書館情報学図書館には手漉き紙を使用した零葉(一葉)があります。内容は旧約聖書の「エゼキエル書」の一部です。

グーテンベルクによって発明された機械的印刷は、その後ヨーロッパで急速に広まり、書物の大量生産を可能にしました。というも、ヨーロッパ中世の写本は人手によって書き写すことで生産されていたからです。近世以降、豊富なコレクションを所蔵する大規模な図書館が西欧でつくられてきた背景にはこうした書物の大量生産がありました。欧米ではグーテンベルクによる活版印刷術の発明が社会や文化に及ぼした影響についても研究されています。



● アメリカ図書館学・書誌学基本文献集

「本についての本」を収集したコレクションで、図書館の管理運営一般や図書館利用法、図書館の歴史、書誌学の基本図書はもちろん、読書論、図書印刷技術の歴史、装丁とその歴史、活字の開発史、原始・古代の印刷、古書・稀覯書の蒐集、手書き本、バイブル印刷史、ブック・イラストレーション、銅版画の歴史、新聞の歴史、著名な図書館創立者の伝記、絵本の歴史をはじめ、アンダーグラウンド出版物の歴史や日本の浮世絵のフランス印刷技術への影響を考察しためづらしいものなども含め、図書館学、書誌学の広い範囲をカバーするものです。

● ロシア・ソ連書誌図書館学資料集成

古代より現代に至るロシア・ソ連において生みだされたあらゆる写本・古版本、活字印写本、自筆文書に関する書誌、科学アカデミー・大学・政府機関・国会・神学校・修道院・宗教会議・博物館など公的図書館および貴族愛書家個人の蔵書目録、出版社・古書店・有力書店の図書目録、書物史・印刷史・書物取引・図書館学史など、およそ出版物に関する図書・雑誌・逐次刊行物の一大集成で、IDC社(International Documentation Co.)のマイクロフィッシュ版です。

● “Encyclopedie methodique, ou, par ordre de matieres” Chez Panckoucke (パンクック「系統的百科全書」)

フランスの『百科全書』補遺の出版元としても知られるパンクック(Charles Joseph Panckoucke, 1736-1798)が企画した百科事典コレクション(全200冊)です。主題別配列を特色とし、娘の代になって漸く完成した大事業でした。

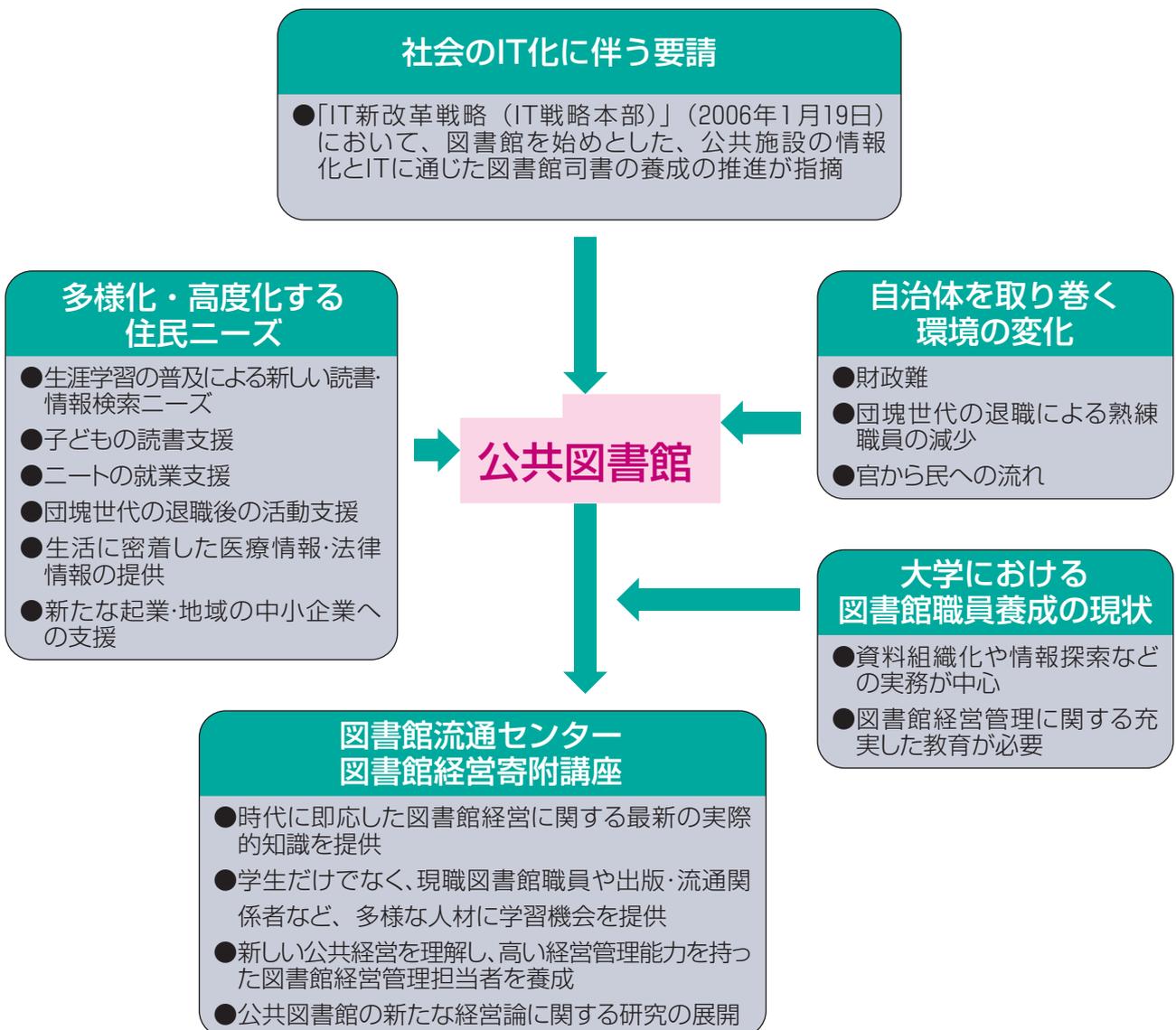
図書館流通センター図書館経営寄附講座

公共図書館を巡る今日の環境において図書館経営のための人材養成が重要かつ喫緊の課題であることを認識し、株式会社図書館流通センターから提供された奨学寄附金により、2006年度より2015年度までの予定で「図書館流通センター図書館経営寄附講座」を開設しています。

株式会社図書館流通センターは、1979年に出版界の総意によって社団法人日本図書館協会事業部の業務を継承する形で設立され、現在では全国の図書館

への図書の流通・販売、目録情報の作成・流通等の図書館サービスへの支援に深く関わっています。

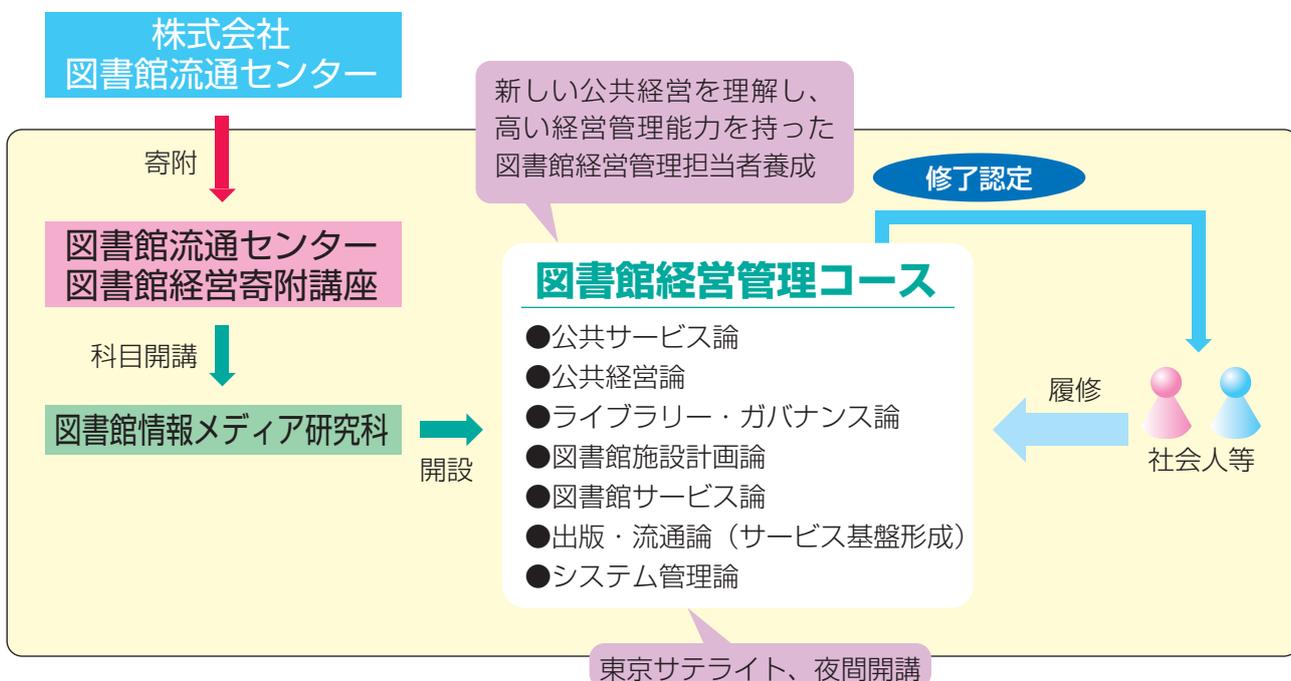
寄附講座では2名の教員を採用し、公共図書館等の経営の基本的な枠組みである公共サービスと公共経営に関する教育を行うとともに、公共サービス研究、公共経営研究、図書館情報メディア研究を総合的に統合して、図書館の新経営論に関する研究に取り組んでいます。



履修証明プログラム 図書館経営管理コース (<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/education/LM/>)

「図書館流通センター図書館経営寄附講座」の設置を受け、2006年度に図書館経営管理コースを開設し、2011年度からは「履修証明プログラム」として開設しています。図書館経営管理コースは、公共図書館や中小規模の大学図書館の経営管理、大規模図書館の部門管理などに携わるうえで必要な知識と能力を開発するため、最新の実際の知識を学ぶ機会を提供することを目的としており、現職図書館員、社会人等に関

われています。コースは寄附講座による公共サービス論、公共経営論に加えて、ライブラリー・ガバナンス論、図書館施設計画論、図書館サービス論、出版・流通論（サービス基盤形成）、システム管理論の7科目で構成されます。これら7科目175時間の講習を受講し、各科目の試験に合格することによって筑波大学長より図書館経営管理コース「履修証明書」が与えられます。



2011年度の受講者数

授業科目	担当者	計
公共サービス論	市川 恵理	17
公共経営論	野本 祐二	16
ライブラリー・ガバナンス論	逸村 裕 ほか	19
図書館施設計画論	植松 貞夫	18
図書館サービス論	薬袋 秀樹 ほか	17
出版・流通論（サービス基盤形成）	緑川 信之 ほか	17
システム管理論	阪口 哲男 ほか	17



知的コミュニティ基盤研究センター (<http://www.kc.tsukuba.ac.jp/>)

本研究センターは、ネットワーク上で、あるいはネットワークを利用して形成される多様なコミュニティについて、それらに必要な知的情報基盤に関する研究を行い、コミュニティの発展に寄与することを目的としています。図書館情報メディア研究科に属する研究センターとして、図書館情報メディア研究と、国際連携、コミュニティ連携活動のフロンティアを担っています。

本研究センターでは、開設以来、研究談話会、国際シンポジウムの開催など、国内外のコミュニティとの連携を重視した活動を続けてきています。これまで、岡山県立図書館におけるメタデータや郷土情報ネットワークに関する岡山県との共同研究、沖縄やハワイ大学と協調したメディカルインフォームドコンセントに関する研究活動、固体素子量子コンピュータの開発に関する日独共同研究 (JST)、Dublin Core Metadata Initiative との連携によるメタデータスキーマレジストリの運用、データベース関係シンポジウム DBWeb の共催、アジア太平洋地区情報学教育研究コンソーシアム (CiSAP) への参加とその関連国際会議の共催等、海外・国内の機関と積極的に連携した活動を進めています。

また、本研究センターでは知的コミュニティ情報システムを運用し、各部門の研究での利用と、知的コミュニティを支えるメタデータの研究開発などに活用しています。

「知の表現基盤」研究部門

知的コミュニティにおける知識伝達を考えると、その知識をどのように表現するかは重要な課題です。たとえば、多面的な内容を含む知識はその理解が困難ですが、三次元 CAD に見られるように、その表現法を工夫することにより的確な知識伝達が可能になります。そこで本部門では、このような知識を解りやすく表現する技術・手法の研究を行い、複雑な事象を視覚的に観察し、インタラクティブに操作できるビューアの研究開発を進めています。

また、知的コミュニティの構成員が必ずしも単一の知識レベルにある訳ではありません。さらに、

必要とする知識の側面や視点は構成員により異なります。そのような状況を想定すると、知的コミュニティ内のコミュニケーションを円滑に進めるための知識レベルの違いを緩衝でき、さらにさまざまな視点から知識を表現できるシステムが必要になってきます。本部門では、異なる知識レベルの人々のコミュニティ形成を支援する技術・手法の研究を行い、科学技術の知識を社会に情報発信していくための専門家向け支援システムの研究開発を進めています。

「知の共有基盤」研究部門

ネットワーク上では、誰もが知識の提供者でありかつ、知識の利用者にもなり得ます。知的コミュニティは、ネットワーク上で知識と情報を協調的に共有する環境を利用して、知識や情報の資源として利用できるコンテンツ、すなわち情報資源を多く作り出します。本部門は、いろいろなコミュニティと連携し、知識と情報を協調的に共有する環境に関わる研究を進めることを役割としています。

本部門では、ネットワーク上においてコミュニティが生産した情報資源を蓄積し、共有し、そして利用するために必要な情報技術の研究開発を行っています。特に、情報資源の共有と相互利用性の向上を中心的な研究トピックとして、デジタルライブラリやデジタルアーカイブ、それを支えるネットワーク指向のメタデータ技術、さらにそれらの基礎となるデータベース技術に関する研究を中心に進めています。具体的には、メタデータ規則を蓄積共有するメタデータスキーマレジストリを核として、メタデータの相互運用性を高めるための情報基盤に関する研究、人間をも要素として含む複合的なデータベース環境を指向した効率的な情報管理技術の研究、ネットワーク環境におけるデジタル情報資源の長期保存とデジタルアーカイブの長期利用のための技術に関する研究などを中心的な研究テーマとした研究を進めています。また、Dublin Core Metadata Initiative (DCMI) との連携やデジタルライブラリや図書館情報学領域の国際コミュニティとの連携など、国内外の組織とも協調しながら研究を進めています。

「知の伝達基盤」研究部門

本部門では、“情報伝達”という要素について、知的コミュニティの構成員という利用者側からの視点から図書館・情報サービス機関といった提供者側の視点に至るまでの広範な領域について、社会科学的アプローチから分析を行っています。

ここでは、知的コミュニティを支えるネットワーク・ライブラリ機能について、主として社会・コミュニティとの関わりの観点から研究します。これは、(1) コミュニケーション行為や知的コミュニティの形成・維持といった知的伝達の様態に関する研究と (2) 知的コミュニティにおいて取り扱われる各種情報の集積や組織化に関する研究とに分けて考えることができます。

前者では、様々な種類の知的コミュニティにおける知識伝達のあり方（例えば、研究者の共著や引用関係に基づくネットワーク分析）、及び各情報サービス機関の機能評価の方法や組織デザインの解明をめざします。後者では、機関リポジトリ構築に関する研究、大学図書館を中核とした高等教育機関における新しい学習環境モデルの構築、及びネットワーク社会における公共図書館サービスの最適化などを推進しています。

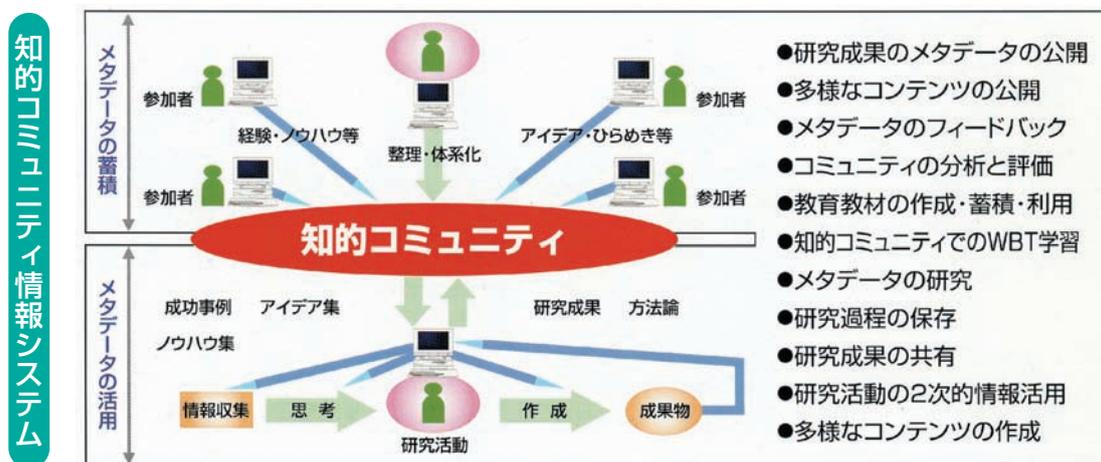
「知の環境基盤」研究部門

情報通信技術が発展していくためには、新しいエレクトロニクス技術の開発が不可欠です。本部門では、知的コミュニティの形成を支える情報通

信環境のさらなる発展を目指して、新しいエレクトロニクス技術につながる基幹デバイスの研究を行っています。

対象となるものに (1) ユビキタス・ネットワーク技術に関するデバイスとして、携帯情報機器にも搭載可能な低消費電力半導体メモリ、無線通信網を支える小型高出力 RF デバイス、(2) 情報の高速・大容量記録を可能にするデバイスとして、超高速大容量半導体メモリや次世代光ディスク用の深紫外発光デバイス、(3) 非従来型の新しい情報処理方式を実現するデバイスとして、量子コンピューティング素子などがあります。こうしたデバイスの性能、信頼性、生産性を向上させるための評価研究を産官学組織と連携して行っています。

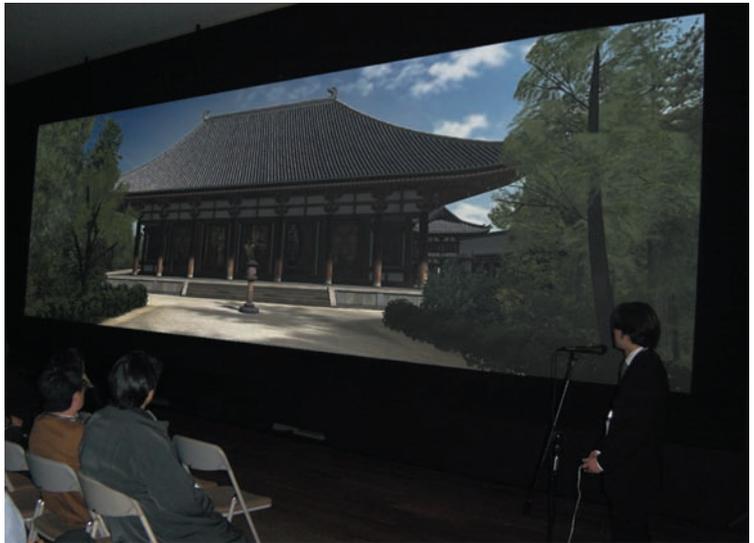
このような研究活動と並行して、エレクトロニクス分野の研究者を対象とした、専門学術分野における知的コミュニティ形成のための活動を進めています。



連携機関

凸版印刷株式会社

凸版印刷は、文字処理、画像処理、データベース構築・運用などの情報処理技術とコンテンツの加工・編集といった感性表現力を駆使して、企業のコミュニケーション、インターフェイスの創造を続けています。一方、超高精細画像処理技術によるバーチャルリアリティの実用化、デジタルアーカイブの構築など、デジタル化とメディア表現の融合する新しい領域にも実績を重ねております。



「唐招提寺展」でのVRコンテンツ上映風景

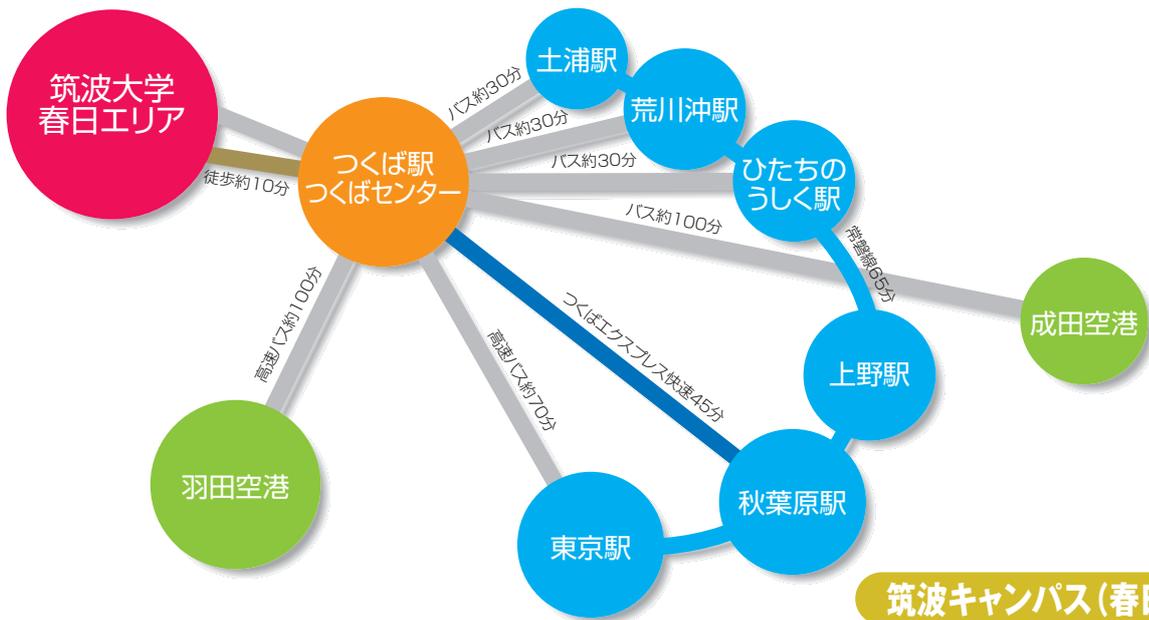
株式会社電通

電通は今でこそ国内最大手の広告会社ですが、その社歴はトリアの連続でした。1901年に創業したときの社名は、実は電報通信社で、当時勃興しつつあった新聞業向けに記事を作って売っていたのです。電通という今の名称は、この電報通信社に由来しています。

新聞社の業績が伸びれば電報通信社の業績も伸びるという意味で、当時の両者は言わば一蓮托生。新聞の経営を助けるために、電報通信社は広告業も営んでいました。戦争の足音が近づく1936年には、通信部門を国策企業の同盟通信社（後の共同通信社、時事通信社）に移譲し、広告専業となります。戦後は1951年の民間ラジオ放送、53年の民間テレビ放送の開始とともに、業容を拡大。通称だった電通という呼び名を正式社名にしたのが55年で、現在に至るというわけです。

このように時代の変化に柔軟に対応しつつ、時には副業を本業にするほどの大胆さを身上とする企業DNAこそ、電通の最大の武器なのかもしれません。さて、過去100年を振り返っても、今ほどのメディア環境の大変革期はそうはありません。おそらくはテレビの登場に匹敵すると言っても間違いではないでしょう。変化はチャンス。情報メディアに関連して、さまざまなビジネスチャンスが見つかるはずです。

大学へのアクセス



筑波キャンパス(春日エリア)

■鉄道

秋葉原からつくばエクスプレス快速に乗ると45分で「つくば駅」に到着します。

JR常磐線 ひたち野うしく駅、荒川沖駅、または土浦駅で下車し、「つくばセンター」行きもしくは「筑波大学中央」行きのバスに乗ると、約30分で「つくばセンター」に到着します。

■高速バス

東京駅八重洲南口高速バスターミナル発「筑波大学・つくばセンター」行きに乗ると、約70分で「つくばセンター」に到着します。

■徒歩

「つくば駅」(A1, A2出口)または「つくばセンター」から徒歩約10分です。

■車

常磐道「桜土浦IC」で降り、東大通りを約5.2km北上し、左折して北大通りに入り、2つ目の信号を左折すると「筑波大学筑波キャンパス(春日エリア)」に到着します。

■飛行機

羽田空港からは高速バスで、成田空港からはバスで「つくばセンター」まで約100分です。

東京サテライト

■地下鉄

東京メトロ丸ノ内線茗荷谷(みょうがだに)駅下車。徒歩2分で「筑波大学東京キャンパス文京校舎」に到着します。



